

恭翁運良の伝記史料

— 『仏林恵日禪師行状』と『仏林恵日禪師塔銘』の訓註—

佐藤 秀孝

凡例

- 一、本史料は鎌倉末期から南北朝初期にかけて活躍した臨済宗法燈派の恭翁運良（元琳・仏恵禪師・仏林恵日禪師、一二六七—一三四一）に関する伝記史料の翻刻・訳註である。
- 一、本史料の翻刻に当たって底本としたのは、東京大学史料編纂所所蔵『名僧行録』巻二に所収される「大日本国越中州黄龍山興化護国禪寺開山勅諭佛林恵日禪師行状」と「越之中州黄龍山興化護国禪寺開山勅諭佛林恵日禪師塔銘并序」である。
- 一、異本として対校することができた史料は、第一に花園大学禅文化研究所所蔵『禅林諸祖行状』四に所収される「大日本国越之中州黄龍山興化護国禪寺開山勅諭佛林恵日禪師行状」と「越之中州黄龍山興化護国禪寺開山勅諭佛林恵日禪師塔銘并序」であり、第二に富山県高岡市大田の摩頂山国泰寺に所蔵される「大日本国賀州路瑞応山伝燈禪寺開山仏林恵日禪師行状」と「越之中州黄龍山興化護国禪寺開山勅諭佛林恵日禪師塔銘并序」であり、第三に伝燈寺保存会編『加賀伝燈寺—歴史資料調査報告—』に収められた石川県金沢市野町の嵩嶽山少林寺に所蔵される「加州瑞応山伝燈護国寺開山恭翁和尚行実」と「瑞応山伝燈護国寺開山恭翁和尚塔銘」である。
- 一、底本には改行などは存しないが、解釈の便を図って全体を内容的に区分し、各箇所に必要な事項についての表題を「」のかたちで挙げておきたい。
- 一、底本の名僧行録本や禅林諸祖行状本は白文で句読点・訓点・返り点などは付されていないが、国泰寺本や少林寺本には訓点・返り点が付されているので、ここでは文意を明らかにするために訓読文の読みに応じて原文にも句読点を付する。
- 一、「峰」と「峯」や「富」と「冨」の違いなど本文の異体字・略体字・俗字については、可能な限り底本に忠実に翻刻したい。ただし、明らかに書写体と考えられる例については、活字による表記の問題から、旧字あるいは正字に改めるものとする。（例）杭―機、忝―去、举―擧、忍―州、閉―聞、兩―兩など。
- 一、踊り字の「々」に関しては、文の区切りや状況などにより元来の字に改めた場合がある。
- 一、原文は旧字体をそのまま用いるが、訓読文では原則として常用漢字に改め、送り仮名も歴史仮名使いではなく現今の表記に統一する。

一、註は読解上に必要と思われる語句の意味を明らかにする範囲に限っておきたい。なお「仏林恵日禪師塔銘」に関しては、註記の内容が「仏林恵日禪師行状」と重複する場合、これを省略あるいは簡略化するものとする。

一、あくまで本史料を読解することを目的とし、他の諸伝との比較検討を通じた恭翁運良伝の総括的な考証は煩瑣にわたるため最小限に留めておきたい。

一、以下、諸本の対校はつぎのごとく表記する。

- ①…禅林諸祖行状本 ②…国泰寺所蔵本 ③…少林寺所蔵本

大日本國越中州黃龍山興化護國禪寺開山勅賜佛林恵日禪師行狀

①大日本國越之中州黃龍山興化護國禪寺開山勅謚佛林恵日禪師行狀

②大日本國賀州路瑞應山傳燈禪寺開山佛林恵日禪師行狀

③加州瑞應山傳燈護國寺開山恭翁和尚行實

大日本國越中州黃龍山興化護國禪寺の開山、勅謚仏林恵日禪師の行狀。

〔出生から出家〕

師諱運良、號恭翁、初名元琳。師絶口而略不道其姓郷邑。夫至人以物迹爲大道之累、況其姓氏等肯以爲童耶。或云羽州人。頽然豐碩、神惠疎朗、一切文字、不假師訓、自然通曉。受業越之後州玉泉寺了然明和尚。十九歲遊方、登壇受具。

號…①号 口而…②而ナシ 略…①畧 姓…①②③姓族 童耶…①②意耶③意邪 神惠…①②③神惠 和尚…①禪師

師、諱は運良、号は恭翁。初め元琳と名づく。師、口を絶して略ぼ其の姓〔族〕・郷邑を道わず。夫れ至人は物迹を以て大道の累いと為す、況んや其の姓氏等は肯て以て意と為さんや。或は羽州の人と云う。頽然として豊碩、神惠疎朗にして、一切の文字、師の訓を仮らず、自然に通曉す。越の後州の玉泉寺の了然明和尚に受業す。十九歳にして遊方し、登壇受具す。

運良：本史料の主人公である臨濟宗法燈派の恭翁運良（初名は元

琳、仏恵禪師・仏林恵日禪師、一二六七—一三四一）のこと。

運良に関する伝記史料には本史料のほかには燈史・僧伝として『扶桑禪林僧宝伝』巻六「仏林恵日禪師伝」と『延宝伝燈録』

巻一五「加州瑞応山伝燈寺恭翁運良禪師」の章と『本朝高僧

伝』巻二六「賀州伝燈寺沙門運良伝」と『大乘聯芳志』「前任

恭翁運良和尚」の章が存している。運良の生年は示寂年時と世

寿の逆算から、文永四年であったことが知られる。

恭翁：法諱の運良との関わりからすると、善良で謹み深いという

良恭（良謹）の意であろう。ただし、運良がなした修行期や住

山期の動静からすると、この人の実際の性格はその逆で、あえ

て他との論議を許さず、不正に対しては断固としてこれを許さ

ない厳格なものを窺わしめる。

元琳：運良がもと元琳と称した事実はこの「行状」のみによって

知られ、他の伝記史料が一切伝えていない。元琳とは大きな美

しい玉、すばらしい最上の宝玉のこと。おそらく運良が生まれ

ながらに優れた資質を備えていたことにちなむ命名であろう。

口を絶して略ぼ其の姓・郷邑を道わす：絶口は口からことばを出

さないこと。自らの俗姓（氏族）や郷里について、運良は平生

て氏姓や郷邑などは無用のものという意。

其の姓氏等：自らの出身の氏姓など世俗における素性。

羽州の人：出羽の人。出羽は羽前（山形県）と羽後（秋田県）に

分けられるが、状況からすると運良は羽前の出身であろう。

『大乘聯芳志』は明確に「羽州人」とする。運良の俗姓が定か

でないため、父母の素姓や幼年時の消息などは不明である。

頤然として豊碩：背が高く肉付き豊かで大柄なこと。運良は体格

に恵まれていたものであろう。『本朝高僧伝』では「生質頤然」

に作る。

神恵疎朗：神恵はきわめて勝れた知恵のことか。疎朗は透き通っ

て朗らかなこと。運良は知恵がすぐれ、大らかで明朗な性格で

あったらしい。『扶桑禪林僧宝伝』では「神智高遠」に作り、

『本朝高僧伝』では「神恵疎朗」に作る。

一切の文字、師の訓を仮らず、自然に通曉す：文字を見ると、師

から何ら教わることなく自然にその意に通達したこと。運良が

幼少の頃からかなり聡明であったさまをいう。

越の後州の玉泉寺：出羽（山形県）田川郡大泉荘の善見山玉泉禪

寺のこと。本史料では越後（新潟県）と記すが、明らかな誤り

である。越後の北部と出羽の東南部が隣接していることから、

撰者がこれを見誤ったか、あるいは玉泉寺の位置が一に越後の

ごとく見られたものであろう。玉泉寺は東北地方の日本海側で

最初に建立された禅刹といつてよいが、その後荒廃し、室町

中期に曹洞宗太源派の南英謙宗（三謙道人、一三八七—一四五

九）によって再興され、東田川郡羽黒町国見の国見山玉川寺と

して現今に及んでいる。

了然明和尚：了然法明（弘章、？—一三〇八？）のこと。高麗

（朝鮮半島）の人。入宋して杭州（浙江省）余杭県の径山興聖

万寿禅寺にて臨濟宗破庵派の無準師範（仏鑑禪師、一一七七一

—一二一七）の

法嗣として臨濟宗破庵派の無準師範（仏鑑禪師、一一七七一

—一二一七）の

法嗣として臨濟宗破庵派の無準師範（仏鑑禪師、一一七七一

—一二一七）の

法嗣として臨濟宗破庵派の無準師範（仏鑑禪師、一一七七一

—一二一七）の

法嗣として臨濟宗破庵派の無準師範（仏鑑禪師、一一七七一

一二四九）に学ぶ。来日して出羽の羽黒山下に草庵を開創して玉泉寺と称する。建長三年（一二五一）頃に越前（福井県）の永平寺に到って晩年の道元に学び、再び玉泉寺に戻って化導を敷く。運良のほか同じ法燈派の孤峰覚明（国済三光国師、一二七一—一三六一）も法明に参学している。南英謙宗は『玉漱軒記』において法明を道元の法嗣として扱っており、『洞上聯燈録』巻一「羽州玉泉寺了然法明禪師」の章に詳しい。受業：剃髪して出家得度すること。得度の師を受業師という。元琳という初名はこのとき法明より授けられたものであろう。

〔登山紹瑾への参学〕

初参洞谷登山瑾禪師、周年之間、盡得曹洞之旨趣。於其授受之際、乃自惟曰、禪有傳授、豈佛祖自證自悟之法。遂棄之。

旨趣：③趣ナシ

初め洞谷の登山瑾禪師に参じ、周年の間に尽く曹洞の旨趣を得たり。其の授受の際に於いて、乃ち自ら惟いて曰く、「禪に伝授有り、豈に仏祖は自証自悟の法ならんや」と。遂に之れを棄つ。

洞谷：曹洞宗の登山紹瑾（仏慈禪師か、一二六四—一二二五または一二六八—一二二五）が開山となった能登（石川県）鹿島郡酒井保（いま羽咋市酒井町）に存する洞谷山永光寺のこと。紹瑾が酒井保の地に草庵を結ぶのは正和二年（一一三三）八月のことであり、永光寺の諸堂が建立されて開堂の儀式が行なわれるのは文保元年（一一三七）に至ってのことである。したがって、受具してまもない運良が永光寺において紹瑾に参学することは時期的にあり得ない。記事に錯綜があるのか、意図的な挿

十九歳：運良の一九歳は弘安八年（一二八五）に当たる。蒙古・高麗の連合軍による弘安の役（再度の元寇）が起こったのは弘安四年のことである。

登壇受具：戒壇に登って師から仏戒（具足戒）を受けること。運良がいずれの寺院で受戒したのかは伝えられていないが、状況からすると下野（栃木県）の薬師寺の戒壇（天下三戒壇の一つ）であろう。下野薬師寺は現在の栃木県河内郡南河内町に存したとされ、中世には下野の安国寺に当てられているが、その後、荒廃して土塁の一部が残るのみとなっている。

入なのかは定かでないが、「行状」のみでなく燈史・僧伝もこの説を受けている。

登山瑾禪師：永平寺開山道元の四世の法孫に当たる登山紹瑾のこと。越前（福井県）多瀬の人で、永平寺第二世の孤雲懷奘（懷辨、一一九八—一二八〇）に就いて出家し、第三世の徹通義介（義鑑、一二一九—一三〇九）の法を嗣いでいる。阿波（徳島県）海部郡の城万寺の住持を経て加賀の大乗寺の第二世となっている。その後、能登の永光寺や諸嶽山総持寺などを開創し、

曹洞宗旨を大いに鼓吹して曹洞宗大発展の基を築く。正中二年（一二二五）八月一日に六二歳（または五八歳）で示寂。『伝光録』『坐禅用心記』『洞谷記』その他の著述が存する。伝記には『洞谷記』に載る自歴の部分のほか、『諸嶽開山二祖禪師行録』『洞谷五祖行実』などが存する。

周年：周歳・期年とも。満一年。年が一回りするごと。

曹洞の旨趣：曹洞宗の宗旨。唐末に活躍した六祖下青原系の洞山良价（悟本大師、八〇七—八六九）と曹山本寂（元証大師、八

〔法燈国師無本覚心との機縁〕

竟聞鷲峯法燈国師熾化於南紀、往諮參、国師示以狗子話、從昏鐘提撕至五鼓、豁然契悟。趨扣丈室、竊作是念、老和尚不可讓。国師見來使曰、除汝胸中劍。師不覺白汗浹背。即問曰、和尚八十二、與學人二十二、是同是別。国師曰、同。從此機語密契、針芥相投。親炙者數歳、辭去遊方、欲訪諸善知識。国師告曰、汝縁在北地、住欽哉。

竟聞：①聞就②③聞 鷲峯：②③鷲峰 法燈：①法灯 昏：②昏 鼓：③鼓 竊：①竊 來：①師 胸：③胃 劍：①劍②三尺劍 與：①与 曰：③云 密：②蜜 辭：③辭 遊：③游 住：②③住

竟に鷲峯の法燈国師の化を南紀に熾んにするを聞き、往いて諮参す。国師、示すに狗子の話を以てし、昏鐘より提撕し、五鼓に至って豁然として契悟す。趨りて丈室を叩くに、竊かに是の念を作さく、「老和尚も譲るべからず」と。国師、来たるを見て使ち曰く、「汝が胸中の剣を除け」と。師、覚えず白汗、背に浹し。即ち問うて曰く、「和尚の八十二と学人の二十二とは、是れ同か是れ別か」と。国師曰く、「同じ、同じ」と。此れより機語密に契い、針芥相い投ず。親炙すること数歳にして、辞し去りて遊方し、諸の善知識を訪ねんと欲す。国師、告げて曰く、「汝が縁は北地に在り、住して欽しめや」と。

四〇—九〇—を派祖とする中国禪の流れであるが、ここでは永平寺の道元の流れを受け継ぐ日本曹洞宗を指す。旨趣は趣意、教えの奥義。

伝授：禪宗で師から弟子に心印を伝えること。面授嗣法のこと。自証自悟の法：自分の力で証悟すること。師に従い経巻に従って証悟するのでなく、無師独悟する立場をいう。ここでは運良が紹瑾の示す曹洞宗旨を自証自悟の法門として捨て去った内容になつてゐる。

鷲峯：紀伊（和歌山県）由良の鷲峯山西方興国禪寺のこと。安貞元年（一二二七）に葛山五郎景倫（入道顯性、？—一二七六）が主君の源実朝（三代将軍、一一九二—一二一九）の菩提を弔うために建立する。もと西方寺と称して真言宗に属しており、南宋から帰国した直後の道元が寺額を揮毫した因縁も存する。建長六年（一二五四）に南宋から帰国した無本覚心がまもなく開山始祖として迎えられ、正嘉二年（一二五八）に入寺する際に禅刹に改められている。ただし、興国寺の寺号は南朝の興国元年（北朝の暦応三年、一三四〇）に命名されているから、連良が到った当時はいまだ西方寺という呼称であったことになろう。臨濟宗法燈派の本山として機能していたが、現在は臨濟宗妙心寺派に属する。興国寺刊『鷲峯余光』や由良町役場編『由良町誌』に詳しい。

法燈国師：法燈派祖の無本覚心（心地房・法燈円明国師、一二〇七—一二九八）のこと。信濃（長野県）近部（神林とも）の人で、二九歳で南都の東大寺戒壇で受具し、高野山伝法院の覚仏に密教を学び、さらに山中の金剛三昧院に退耕行勇（莊嚴房、一一六三—一二四一）を訪ね、行勇が鎌倉の寿福寺に遷るのに随侍する。京都深草の興聖宝林寺に道元を訪ねて菩薩戒を受けるなど、国内各地の善知識を歴参した後、入宋して杭州（浙江省）錢塘県の靈洞山護国仁王禅寺において楊岐派の無門慧開（仏眼禅師、一一八三—一二六〇）に参じ、法を嗣いで帰国する。金剛三昧院に住持した後、由良の鷲峯山西方興国禪寺に開山に迎えられる。永仁六年（一二九八）一〇月一三日に九二歳で示寂。伝は『鷲峯開山法燈円明国師行実年譜』などに詳しい。

南紀：紀伊・紀州のこと。畿内の南に位置するのになむ。鷲峯山西方興国寺は紀伊海部郡由良荘（いま和歌山県日高郡由良町

門前）に存する。

諸参：咨参とも。訪ねて参ずること。師について問法すること。狗子の話：唐宋の趙州從諗（真際大師、七七八—八九七）が一僧より「狗子、還た仏性有りや」と問われて「無」と答えた有名な古則公案。趙州狗子・趙州無字と称される。無門慧開の『無門関』第一則「趙州狗子」には「趙州和尚、因僧問、狗子還有「仏性」也無。州云、無」とある。覚心が慧開の禅旨を受け継いで無字の公案をもって学人を指導していたことが窺われる。昏鐘：黄昏（夕暮れ）を知らせる鐘。夕刻の初夜（午後七時頃）に鳴らされる鐘。

提撕：師が修行者を接化指導すること。もと耳を引っ張って口元に近づけ警覚する意。

五鼓：日没から夜明けまでの一夜を五更に分けて時刻を知らせた更鼓の五更目の鼓声のこと。暁天（明け方）に鳴らす大鼓で、いまの午前四時前後に当たる。

豁然として契悟す：豁然は行き詰まっていた心からりと開けるさま。契悟は開悟に同じく、悟りに契当すること。おそらく連良は明け方まで坐禅を組んで「趙州狗子」の公案を参究しつつ、忽然として省悟したのであろう。

丈室：方丈のこと。住持の居間・寢室。一丈四方の部屋の意で、維摩居士の故事になむ。

老和尚も譲るべからず：譲るは責める、詰問すること。自らの契悟に慢心する連良は覚心がすぐにも印可を与えてくれるものと思ひ込んでいたことをいう。

汝が胸中の剣を除け：心の中にわだかまっている剣を抜け、心にある思いを捨てよということ。覚心がいまだ連良の境界を認めなかったことをいう。

白汗、背に洩し：白汗は白い玉のような汗。背に洩しとは背中に

あまねく行き渡ること。

和尚の八十二と学人の二十二とは是れ同か是れ別か；覚心と運良の年齢差は干支をちょうど一回ずらした六一歳であり、覚心が八二歳で、運良が二二歳であったのは正応元年（弘安十一年、一二八八）に相当する。覚心の生まれた承元元年（一二〇七）と運良が生まれた文永四年（一二六七）はともに干支では丁卯の年に当たっている。

同じ同じ：師匠の自己と学人の自己が年齢を超えて同じであり、同じ価値を持った者同志であること。

機語密に契い、針芥相い投ず：機語は機縁の語句のこと。密に契うとは師と弟子の機語が親密に契当し合うこと。針芥相い投ずとは難知難遇の譬えて、地上に針を立て上から芥子を投げて針に的中させること。師と弟子の機縁が契うさまを針穴と芥子が相い投ずるのに譬えている。南本『涅槃経』「純陀品」に「芥子投針鋒、仏出難於是」とある。

〔東大寺戒壇院と且過寮〕

師少有出群作略、名聞四方。故一時宗匠、共推尊之、稱元琳長老。其肆説如蘇張之雄辯、其應機如孫吳之用兵、諸老斂狂莫敢當其鋒。往詣東大寺、因聽戒壇主講華嚴六相義、屢加難問。主箝口不言、即自慚服、就問別傳之旨。師曰、我佛祖單傳之正宗、豈義學之所階哉、然既問不可不言。即示以宗門關捩。主之所未聞也、疑網頓除、起而作禮曰、若不見師、安得窺佛祖之玄樞。師從容告曰、我師法灯、昔遊於此時、戒壇叡尊、探直指之道有省。又有一老宿、虔恭諮啓、於是省悟、忽坐化。尊乃建且過於戒壇院、待十六開土委報法燈、今也不給、起廢於不朽、不亦可哉。主即諾。爾來復接雲水之衲子、且過之再興者、實師之力也。尊贈諡與正菩薩。

親炙すること数歳にして：親炙はその人に近づき感化を受けること。運良が覚心に随侍したのが正応元年より数歳であったとすれば、おそらく運良は覚心の最期を看取ることなく、早くに由良の西方寺を離れているものと推測される。

遊方：諸方を遊歴すること。四方を經巡ること。諸地に行脚して仏道を修行すること。

善知識：善き友、善き師。正しい指導者。正しい仏道に導き入らしめてくれる師家。

汝が縁は北地に在り、住して斂しめや：覚心の記別（記別）に當たる。後に運良が越中の興化寺に化導を敷くことを予言した内容。北地に根を下ろして着実な接化をなすべきことを示している。斂は謹む、敬うこと。『延宝伝燈録』や『本朝高僧伝』では覚心が運良に囑したことは「子縁在北地、遭十則止」であったとされる。

出群：①出塵②出郡 略：①③畧 四方：①②③諸方 稱：①③称 蘇張：①蘇長②③蘇張 辯：①辨 斂：③斂 慚：①②③慚 學之：

③之ナン 關振：①②③關振 禮：①②③礼 法灯：①我灯②③法燈 諍：②諍 委報法燈：①以報法灯②③以報法燈 可哉：①②③宜乎
爾來：①②爾來 諍—③諍

師、少くして出群の作略有り、名は四方に聞ゆ。故に一時の宗匠、共に推して之れを尊び、元琳長老と称す。其の肆説は蘇張の雄弁の如く、其の応機は孫呉の用兵の如し、諸老、衽を斂して敢て其の鋒に当たたる莫し。往いて東大寺に詣で、因みに戒壇主の華嚴六相義を講ずるを聴き、屢しば難問を加う。主、口を箝して言わず、即ち自ら慚服し、就で別伝の旨を問う。師曰く、「我が仏祖単伝の正宗、豈に義字の階む所ならんや。然れども既に問ひあれば言わざるべからず」と。即ち示すに宗門の関楨を以てす。主の未だ聞かざる所にして、疑網は頓に除かれ、起ちて礼を作して曰く、「若し師に見えずば、安んぞ仏祖の玄枢を窺うを得ん」と。師、從容として告げて曰く、「我が師法灯、昔し此に遊びし時、戒壇の叡尊、直指の道を探りて省有り。又た一老宿有り、虔恭諂啓し、是に於いて省悟し、忽ち坐化す。尊乃ち且過を戒壇院に建て、十六開土を待え、委しく法燈に報ず。今や給わらず、廃を不朽に起こすこと、亦た可ならざらんや」と。主、即ち諾す。爾來、復た雲水の衲子を接す。且過の再興は、実に師の力なり。尊を興正菩薩と贈諡す。

出群の作略：出群は多くの人から抜け出る、人並み外れたの意。

抜群に同じ。作略は学人指導の方法・手段。一に出塵の作略ともあり、出塵とは俗塵から出離すること。

宗匠：宗師・師家のこと。禅宗の指導者。禅匠。

元琳長老：名声は諸方に知れ渡り、ときの尊宿らから「元琳長老」という尊称をもって呼ばれていたとされる。当時、なお運良は元琳の法諱を使用していたことが知られ、若くしてかなり
の知名度を得ていたものらしい。

肆説は蘇張の雄弁の如く：肆説は説を肆にする、口に任せて思いのすべてを遠慮なく言うこと。運良が自在に説法するさまを中国の戦国時代の弁論家として名高い蘇秦（字は季子、？—前三

一七）や張儀（？—前三〇九）の雄弁に比している。蘇秦は洛陽（河南省）の人で、鬼谷子に師事し、戦国時代に秦に対抗して燕・趙・韓・魏・斉・楚の六国による合従策を唱えたが、後に暗殺される。張儀は魏の人で、鬼谷子に師事し、諸侯に対して秦と結ぶ連衡策を説き、秦に仕えた後に魏に帰って宰相となる。蘇張の舌で詭弁の意がある。

応機は孫呉の用兵の如し：応機は機に応ずる、機根に応ずる、相手の能力に応じて適切な手段を用いること。運良が学人の機根に応じて自在に接化するさまを春秋時代の兵法家である兵家の孫武（孫子）と呉起（呉子）の用兵に譬えている。孫武は斉の人で、兵法をもって呉王闔閭に仕え、『孫子』兵法十三篇を著

す。呉起は衛の人で、魯・魏・楚など諸国に重用され、『呉子』一卷を残す。兵家は諸子百家の一つで、用兵の道を講じた。用兵は兵士・兵器を用いること、軍隊を指揮して動かすこと。

衽を斂して：斂は斂。衽を斂すとは襟を正すこと、服装や態度を正しくすること。諸山の長老の多くが連良の前で、服を正し、あえてその機鋒に当たる者がなかったことをいう。

東大寺：東大寺は華嚴宗の拠点として古く天平年間（七二九—七四一）に聖武天皇（七〇一—七五七）、在位は七二四—七四九の発願で平城宮（奈良）の東側に建立された官大寺であり、金銅の毘盧舎那大仏坐像の造立で知られる。かつて明庵栄西（千光法師、一一四一—一二一五）は重源（俊乗房、一一二一—一二〇六）による東大寺大仏殿の再建に協力し、重源の後を受けて東大寺勸進職を勤めているが、栄西門流にも連なる覚心とその系統の人々にとっても、東大寺は関わり深い寺院であったといえる。平岡定海『東大寺の歴史』や奈良文化財研究所編『東大寺文書目録』などが存する。

戒壇主：東大寺戒壇院の院主。東大寺の戒壇院は天平勝宝六年（七五四）に鑑真（唐大和上・過海大師、六八八—七六三）が築いたのに始まり、具足戒（比丘戒）を授ける南部の壇場として重きをなした。『本朝高僧伝』では、このとき連良と会った院主の名を凝然（示観房、一二四〇—一三二一）と記している。凝然は伊予（愛媛県）の人で、比叡山と東大寺の両戒壇で受戒した後、華嚴宗の円照（実相房、一二二一—一二七七）に師事し、さらに八宗を兼修して建治三年（一二七七）より東大寺戒壇院の院主となっている。『八宗綱要』をはじめ多数の著述を残し、華嚴宗の学僧として名声を馳せる。元亨元年九月五日に八二歳で示寂。伝は『凝然国師年譜』などに詳しい。

華嚴六相義：十玄門とともに華嚴宗の重要な教義であり、一々の

事相に具わっているとす。総相・別相・同相・異相・成相・壊相という六種の相から見た存在のあり方をいう。総相とは一つひとつが一切のものを包含していること。別相とは一つひとつが有する特別のすがた。同相とは同一のすがた。異相とは他と異なつたすがた。成相とは個々の中に包含されている他の一切がそれそれの働きを成して同一目的を成り立たしめていること。壊相とは個々が各自の本性を失わずにその働きを果たしていること。すべての存在がこの六相を具えて互いに他を礙げることなく、一即一切、一切即一の関係で、一と一が一体化して円かに融け合っていることを示している。

口を箝じて言わず：口を嚙んで何も言わないこと。箝は閉ざす、嚙むこと。

慚服：自ら慚じいって心服すること。慚は自らを顧みて恥じること。他に対して恥じる愧と合わせて慚愧という。

別伝の旨：教外別伝の宗旨。禅宗の教え。

仏祖単伝の正宗、豈に義学の階む所ならんや：禅宗の宗旨が学義の解釈研究を中心とする義学の徒にとっては容易に踏み得ない旨であること。仏祖単伝の正宗とは歴代の仏祖が師資相承してきた禅宗の宗旨。義学とは経論を研究し、文字やことばの義理によって諸法を解釈する教宗の立場。

宗門の関板：関板は機軸・からくり。とくに戸の開閉に便するため取り付ける板（とまら）と戸臍（とぼそ）をいう。禅宗の教えの要、仏法の肝要なところ。

疑網：疑いが心を束縛して不自由なさまを網に譬える。分別心。仏祖の玄枢：玄枢は幽玄な枢機、肝心かなめの教え。歴代の仏祖が伝えてきた奥深い宗旨。

我が師法灯、昔し此に遊ぶ：覚心が東大寺の戒壇院を訪れた記事は、受戒のときに訪れたのを除くと覚心の伝記史料でも定か

ない。わずかに『本朝高僧伝』巻五九の「和州西大寺沙門睿尊傳」に、睿尊が由良の覚心と逢って禅の宗旨を知り、東大寺戒壇院の前に且過寮を設けて修行僧の施設としたことが記されている。

睿尊：睿尊（睿尊とも、思円・興正菩薩、一二〇一—一二九〇）のこと。睿尊は大和（奈良県）箕田の人。一七歳で出家し、密教や南都の教学を学び、南都西大寺に住持する。律宗の僧として西大寺の中興と称えられ、西大寺を中心に各地で戒律の復興と社会救済事業に邁進したことで名高い。とくに弟子の忍性（良観・医王如来、一二二七—一三〇三）とともに奈良北山宿などで盛んに文殊供養や施行を行なって社会の底辺にうごめく人々の救済に尽力したことは貴重である。正応三年八月二五日に示寂。世寿九〇歳。伝記史料を集めた奈良国立文化財研究所監修『西大寺睿尊伝記集成』が存する。

直指の道：直指は直指単伝のこと。師から弟子へ直接に心に指し示して伝えてきた禅宗の教え。

一老宿：老尊宿、修行を積んだ老齢の僧侶。覚心の教えに恭敬した東大寺内の老僧であろうが、如何なる人物かは定かでない。虔恭諂啓：虔恭は謹んで恭しくする、諂啓は問い尋ねること。省悟：自己を内省して悟ること。省も悟るの意。

〔大応国師南浦紹明への参学〕

師如京依萬壽南浦明和尚。于時浦舉徳山末後句話示衆、衆咸不契。師乃答云、毒藥醍醐一器盛。浦擊節稱賞、極愛厥俊利、待之于明窓下甚厚。浦往相陽、建長壽福兩寺之間、師隨行親近。浦嘗稱於衆曰、古人節角諂訛處、即好下語批判僧是也、必爲再來人。浦主巨福、講碧岩。一日、師自偏室出、吐師子吼曰、和尚老矣、引誤學者。浦瞑目良久、即輟講席、仍徵師曰、那裏是老僧諂訛處。師啓發之、言鋒如破竹、節々皆迎刃而解。浦首肯、便巡察通告衆曰、今日之講説、乃元琳長老之所演如此。

坐化：坐脱・坐亡とも。坐禅を組んだまま逝去すること。立亡に對する。

且過：諸方を歴遊する修行者が寺院に宿泊して一夜を過ごすこと。その施設を且過寮という。睿尊は且過寮を東大寺戒壇院に建てて覚心に告げたとされる。

十六開士：開士は菩薩の意識。正しい教えを開き説いて人々を導く士夫。ただし、ここでは十六大阿羅漢の意か。阿羅漢アラハットBrahmaは小乗における最高の聖者で、供養を受けるに相応しい人の意から応供と訳される。

廢を不朽に起こす：荒廢した且過寮の寮舎を永劫に起こすこと。運良が到った当時、すでに覚心ゆかりの且過寮は荒廢していたのであろう。

雲水の衲子：雲遊萍寄の徒。雲衲。衲子は衲衣を着た者、行雲流水のごとく諸方を行脚する修行者。

且過の再興：睿尊と覚心との因縁を院主に告げた運良は、且過寮の再興を院主に願ったとされる。

尊を興正菩薩と贈諡す：正安二年（一三〇〇）に朝廷が亡き睿尊に賜った勅諡号。この「行状」では睿尊に興正菩薩の勅諡号が下賜される背景に、運良と凝然による且過寮の復興事業が存したとする。

萬…①③万 答云…①②③有 盛…①②③盛之語 稱…①③稱 愛厭…①③愛其②受其 于…①③于ナン②於 甚厚…②③ナン 往…②
住 隨行…①②③皆 嘗稱…①嘗稱②③嘗稱 必爲再來人…①②③必再來人也 岩…②③巖 吐…①②③ナン 瞑…①溟 裏…②裡 發…
①②③ナン 説…①②③ナン 乃…①②③ナン 長老…③ナン 所演…①②③義 如此…①下ニ云云②③下ニ々々

師、京に如きて万寿の南浦明和尚に依る。時に浦、徳山末後句の話を挙して衆に示すに、衆威みな契あわらず。師、乃ち答えて云く、「毒薬・醍醐、一器に盛る」と。浦、節を撃ちて称賞し、極めて厥その俊利なるを愛し、之れを明窓下に待すること甚だ厚し。浦、相陽に往くに、建長・寿福の両寺の間、師、随行して親近す。浦、嘗て衆に称して曰く、「古人が節角誦訛の処、即ち好んで下語批判する僧は是れなり、必ずや再来人為らん」と。浦、巨福を主り、碧岩を講ず。一日、師、偏室より出で、師子吼を吐いて曰く、「和尚は耄おぼいたり、学者を引誤せり」と。浦、瞑目すること良久して、即ち講席を輟め、仍て師を徴して曰く、「那裏か是れ老僧が誦訛の処ぞ」と。師、之れに啓発し、言鋒は竹を破るに節々に皆な刃を迎えて解くが如し。浦、首めて肯い、便ち寮を巡りて遍く衆に告げて曰く、「今日の講説は、乃ち元琳長老の演ぶる所、此の如し」と。

万寿…洛東東山の京城山（九重山）万寿寺のこと。万寿寺は臨済宗聖一派の東山湛照（十地上人・宝寛禪師、一二三一一—一二九一）によって開創された禪寺であり、後に京都五山の第五位に列した名刹である。もと五条樋口に存したが、天正年間（一五七三—一五九一）に東福寺北門内に移る。紹明は嘉元三年（一三〇五）七月二〇日に万寿寺に開堂して第六世となっている。南浦明和尚…臨済宗松源派（大応派祖）の南浦紹明（円通大応国師、一二三五—一三〇八）のこと。駿河（静岡県）安部の人。郷里建穂寺の淨辯に師事して一五歳で受具し、鎌倉の建長寺に松源派（大覚派祖）の蘭溪道隆に参じた後、入宋して杭州銭塘県の南屏山淨慈報恩光孝禅寺や杭州余杭県の径山興聖万寿禅寺で松源派の虚堂智愚（息耕叟、一一八五—一二六九）に学んで法を嗣ぐ。帰国して後、文永七年（一二七〇）に筑前（福岡

県）姪浜の海晏山興徳寺に開堂し、翌年に太宰府の横岳山崇福寺に任じて三三年に及び、北九州に化導を敷く。晩年に至って京都の万寿寺に遷住し、さらに鎌倉の建長寺に陞住する。延慶元年（二月二九日）に七四歳で示寂。その門流は宗峰妙超（大燈国師、一二八二—一三三七）や関山慧玄（一二七七一—一三六〇）らの活動を通して大応派（応燈関の一流）として展開し、日本禅宗の林下の一大動脈として今日に及んでいる。『大応国師語録』三巻が存し、巻末に「円通大応国師塔銘」が付される。

徳山末後句の話…「徳山托鉢」とも称され、唐末の徳山宣鑑（周金剛・見性大師、七八〇—八六五）が法嗣の巖頭全藏（全豁・清儼大師、八二八—八八七）と雪峰義存（真覺大師、八二二—九〇八）と交わした問答商量であり、『無門関』第一三則に

「徳山一日托鉢下堂、見雪寒問者老漢鐘未鳴鼓未響、托鉢向甚処去。山便回方丈。峯拳似巖頭。頭云、大小徳山、未会未後句。山聞令侍者喚巖頭来、問曰、汝不肯老僧一那。巖頭密啓其意、山乃休去。明日陞座、果与尋常不同。巖頭至僧堂前、拈掌大笑云、且喜得老漢会未後句、他後天下人不奈伊何」とある。鉢盂（応量器）を持って僧堂に到る托鉢（ここでは行鉢入堂の意）という日常の行為の中に末後向上の句を示さんとするものである。末後の句とは辞世の語を指すこともあるが、ここでは仏法ぎりぎり決着の一句、仏法の究極の一句のことを指している。

毒薬・醍醐、一器に盛る：毒薬は生命や健康を害するもの、醍醐は精製した最高級の乳製品であつていわば良薬であるから、毒と薬が一つの器に盛られているとは、受取り手によつてその法悦に浴することもできれば、誤つて命を落とすことにもなりかねないという意になろう。

節を撃ちて称賞し：撃節は拍子をとること、人の詩などを褒めること。称賞は誉め称えること。

俊利：聡くすばやい、すぐれて鋭い。

明窓下に待する：明窓下とは僧堂の中の明かり窓の下。待するは接待すること。僧堂内では前板首座（前堂首座）の板頭と西堂の板頭の頭上に窓が開けられていることから、ここでは紹明が運良を高く評価し、待遇して僧堂の前板首座（第一座）に任じたことを意味しよう。

相陽：相模（神奈川県）のこと。とくに鎌倉を指す。「円通大応国師塔銘」によれば、紹明が鎌倉に赴いたのは徳治二年（一三〇七）であり、はじめ鎌倉山ノ内の正観寺に留錫している。

建長：鎌倉山ノ内に存する巨福山建長興国禅寺のこと。鎌倉幕府第五代執権の北条時頼（最明寺殿・道崇、一二二七—一二六

三）が建長年間（一二四九—一二五六）に開創し、大覚派祖の蘭溪道隆（大覚禅師、一二三一—一二七八）を開山とする。後に鎌倉五山の第一位に列し、多くの名僧が住持して重きをなした。現在は臨済宗建長寺派の本山。「円通大応国師塔銘」によれば、紹明は若くして道隆に参学した経歴が存し、北条貞時（崇演、一二七一—一二三二）の請を受けて徳治二年二月二十九日に建長寺の第一二世に陞住している。

寿福：鎌倉扇ヶ谷に存する龜谷山金剛寿福禅寺のこと。正治二年（一二〇〇）に北条政子（尼将軍、一一五七—一二二五）が伽藍を建立し、黄龍派の明庵栄西（千光法師、一一四一—一二一五）を開山とする。もと禅密兼修の道場であつたが、しだいに禅刹として整備され、後に鎌倉五山の第三位となる。ただし、紹明が寿福寺の住持に就任したという記録は他に見られない。節角請訛の処：言説やことがら紛糾して錯綜していること。節角とは文字の節ばつたり出つたりしたところのこと。請訛とはことばが訛つて理解しにくいこと。

下語批判：下語とは師が弟子に与える教訓のことば。ここでは古則公案に対して自己の見解を述べることを、著語（コメント）や一転語を示すこと。批判とは、ものごとの価値や善悪を判定すること、開き示して裁きすること。

再来人：再来の人とは、再びこの世に生まれ出た人。仏菩薩などの化身。ここでは巖頭全歳や雪峰義存の生まれ変わりといった意か。

巨福：建長寺の山号である巨福山のこと。
碧岩：『碧巖録』一〇巻のこと。北宋代に雲門宗の雪竇重顕（隱之・明覚禅師、九八〇—一〇五二）が拈提した「雪竇和尚頌古百則」に対し、臨済宗楊岐派の圓悟克勤（仏果禅師、一〇六三—一一三五）が垂示・著語・評唱を加えて成つた公案集。詳

しくは『仏果園悟禪師碧巖録』と。古来より宗門第一の書と称えられている。

偏室：傍らの部屋の意か。法堂などに隣接する小室のことか。

獅子吼：獅子吼。獅子（ライオン）の吼える声。獅子の吼えるごとく法を説くこと。

和尚は耄いたり、学者を引誤せり：耄とは老いる、古い耄れること。

と。学者は仏道を学ぶ修行者。引誤は引いて誤らせる、人を誤った方向に導くこと。

瞑目すること良久して：瞑目は目を閉じること。良久はしばらく沈黙すること。

啓発：教え導いて悟らせること。心を開き菩提心を起こすこと。

「峨山韶頓・明峰素哲の育成」

既而辭去北遊。先是、師在城南深草日、瑩山商量師劔刃上話、因約以加州休息之地。其徒峨山積、又問劔刃上事瑩山。山曰、你往見琳公、侘必能成就這話。便賣書去見師。師一日命積剪紙、風吹飄轉、以刀尺鎮之。師曰、此是風力所轉耶、抑亦你轉處耶。積即舉所持尺。師曰、你我弟子也。積曰、祇承師證明。走而出。瑩山又付書明峯哲、成問師于不識話。師相對只寒暄而已、渾無言說、哲亦不肯舉話、留七宿而辭。師以一緘報之、回呈瑩山曰、這僧參得不識話了也。哲聞之、當下知解水釋。

既而：①②③ナン 辭去：①辭而②③辭 遊：③游 劔：③劍 事：③下ニ於アリ 侘：③他 刀尺：①②③尺 亦：③又 處：②処 祇：②③祇 成：①②③來 于：①②③ナン 師相對：①②③便相投 暄：①②③温 而辭：①②③辭 米：③冰 釋：①③釈

既にして辭し去りて北遊す。是れより先、師、城南深草に在りし日、瑩山、師に劔刃上の話を商量し、因りて約するに加州休息の地を以てす。其の徒、峨山積、又た劔刃上の事を瑩山に問う。山曰く、「你、往いて琳公に見えよ、侘、必ず能く這の話を成就せん」と。便ち書を賣て去きて師に見えしむ。師、一日、積に命じて紙を剪らしむるに、風吹きて飄轉し、刀尺を以て之れを鎮う。師曰く、「此れは是れ風力の転する所か、抑た亦た你的転する処か」と。積、即ち持つ所の尺を挙ぐ。師曰

言鋒は竹を破るに節々に皆な刃を迎えて解くが如し：ことばの鋭さは竹を割るのに節ごとに刃を自在に使って解き明かすようであること。『本朝高僧伝』の連良伝では、その答えの無礙自在なさまを『莊子』『養生主篇』に「庖丁解牛」として載る包丁が牛を捌く故事に比してある。いずれも連良の答えが微に入り細に入り、拈提が自在であったことを示す。

元琳長老の演ぶる所、此の如し：連良の才覚に庄倒されて舌を巻き、建長寺内の各寮舎を巡察して連良を称賛する老古維紹明の心情が伝わる逸話である。当時なお連良は元琳の名で呼ばれていたらしい。

く、「你は我が弟子なり」と。積曰く、「祇だ師の証明を承くるのみ」と。走りて出づ。瑩山、又た書を明峯哲に付し、成りて「来たりて」師に不識話を問わしむ。師、相い対して只だ寒暄するのみにして、渾て言説無し。哲も亦た肯て拳話せず、留ること七宿して辞す。師、一緘を以て之れに報じ、回りに瑩山に呈して曰く、「この僧、不識話に参得し了われり」と。哲、之れを聞きて当下に知解氷積す。

北遊：鎌倉から北遊して遙か加賀の地に到ったこと。時期は不明ながら、おそらく運良は紹明が示寂する延慶元年（一一三〇）の前後には鎌倉を離れていることになろうか。

是れより先：具体的に何時のことか定かでないが、運良が万寿寺の紹明の席下など京都禅林にいたったことか消息であろう。

城南深草：京都城南の宇治郡深草のこと。あるいは道元が開創した深草の興聖宝林禅寺のことを指しているのであろうか。道元が越前に下向して永平寺を開いて以降、深草と曹洞宗との関わりを伝える貴重な消息である。

瑩山：瑩山紹瑾のこと。先に運良が永光寺の紹瑾の門に投じたとする記事との混同であろう。紹瑾が永仁六年（一一九八）に大乘寺の住持となつて以降の消息と見られる。

剣刃上の話：抜き身の剣に直面した事態。真剣を抜き放ったとき、一切の思慮分別を切断了た消息。剣刃とは剣の刃、両刃のある刀。唐末の臨済義玄（慧照禅師、？—八六六）と一僧との問答にちなみ、『鎮州臨済慧照禅師語録』（単に『臨済録』とも）の「上堂」に「僧問、如何是剣刃上事。師云、禍事禍事。僧擬議。師便打」とある。

商量：商品の値段を相談して定めること、転じて問答して審議すること。運良と紹瑾はぎりぎりの生死の一大事を課題として問答商量を交わしているものと見られる。

約するに加州休息の地を以てす：休息は休止、休み憩うこと。運良と紹瑾が互いに意気投合し、加賀での再会を約したのであらう。

峨山積：積とあるのは素積すなわち峨山紹碩（紹碩とも、一一七六—一三六六）のこと。紹碩は能登羽咋郡瓜生田の源氏の出身。比叡山で落髪受戒し、大乘寺の紹瑾に投じて徳治元年（一一三〇）に悟道する。その後、運良に参学したのらしく、この消息は『延宝伝燈録』巻七「能州総持二世峨山紹碩禅師」の章や『本朝高僧伝』巻三一「能州総持寺沙門紹碩伝」にも載る。紹瑾の晩年に能登（石川県）の諸獄山総持寺第二代を継承し、永光寺第四代にも輪任している。北朝の貞治五年（南朝の正平二年）一〇月二〇日に九一歳で示寂。五哲ないし二十五哲と称される多くの門人を育成して曹洞宗大発展の基礎を築き、門流の峨山派は全国展開を果たしている。伝記史料に「総持二世峨山和尚行状」や「諸獄開山二祖禅師行録」などが存する。

琳公：この時点でも、なお運良が元琳という名で呼ばれている。必ず能くこの話を成就せん：剣刃上の公案を了畢すること。運良に尋ねてみれば決着が付くであろうという意。

費：齋に同じ。もたらす・持つていく・与える・渡すの意。積に命じて紙を剪らしむ：運良が紹碩に対して紙を剪るように命

じたこと。紙を切るとは手にしたハサミを實際に使用する意である。剣刃上の公案を概念ではなく實際の行動によって見究めさせようとしたことになろう。

風吹きて飄転し、刀尺を以て之れを鎮う；紙を切ろうとすると、不意に一陣の風が吹いて紙が舞い飛び、韶碩が慌てて刀尺で紙を押さえ付けたこと。刀尺はハサミと物差し。

此れは是れ風力の転ずる所か、抑た亦た你的転ずる処か；風が動くか紙が動くかというのは、あたかも彼の六祖慧能（大鑑禪師・盧行者、六三八―七一三）にまつわる有名な「風幡問答」の話をすらすら連想せしめるものがある。このとき韶碩はすぐさま所持していた尺を掲げており、自らその活作略を運良に示している。

你は我が弟子なり；韶碩の素早いはたらきを見て真の弟子として印可したことば。

祇だ師の証明を承くるのみ；運良の印可証明を素直に受けているが、その場を走り去ったのは運良からの嗣法の誘いを断つたことを意味しよう。

明峯哲：明峯素哲（初名は常禪、一二七七―一三五〇）のこと。

加賀の富樫氏。比叡山で落髪受具して京都の東山建仁寺に投じ、大乘寺の紹瑾の門に入る。遍参して運良に参学して後、紹瑾の法を嗣いで「四門人六兄弟」の第一位に名を連ねる。紹瑾の門流を束ねる僧録として能登永光寺や加賀大乘寺を継承し、越中（富山県）水見の海慧山光禪寺を開創する。北朝の観応元年（南朝の正平五年）三月二八日に七四歳で示寂。伝として明峰派の寂庵道光（？―一七五五）が撰した「光禪開山老和尚行

業記」が存し、運良との機縁も載せられている。また運良との機縁は『延宝伝燈録』巻七「加州大乘三世明峯素哲禪師」の章や『本朝高僧伝』巻二〇「賀州大乘寺沙門素哲伝」にも載る。

不識話：「達磨不識」の話頭のこと。禪宗初祖の菩提達磨が梁の武帝と交わした有名な因縁で、「聖諦第一義」「達磨廓然」「達磨廓然無聖」としても知られる。『碧巖録』第一則や「宏智頌古」（のち『從容録』第二則によって知られる。『碧巖録』第一則「聖諦第一義」によれば「挙、梁武帝問達磨大師、如何是聖諦第一義。磨云、廓然無聖。帝曰、对朕者誰。磨云、不識。帝不契。達磨遂渡江至魏。帝後举問志公。志公云、陛下還識此人否。帝云、不識。志公云、此是觀音大士、伝心印。帝悔遂遣使去請。志公云、莫道陛下發使去取、闔人去、佗亦不回」とある。

寒暄：寒温とも。寒さと温かさ。暑さ寒さの挨拶。時候の挨拶。挙話：祖師の話頭（古則）を提起すること。ここでは「達磨不識」の公案について質問すること。

留ること七宿して辞す：七日間を逗留してその門を辞したのこと。七宿の意図は定かでない。

一緘：一通の書簡。緘は封をした手紙。

この僧、不識話に参得し了われり；素哲が完全に「達磨不識」の公案を究め尽くしたことを認可したことは。

知解氷积：知解は観念的な解釈、是非分別する心。氷积は水が解けること、わだかまりや疑いの念が水の溶けるように消え去ること。

「加賀大乘寺への開堂と勇退」

師遂北矣、即空大乘寺令爲住持、依託以一夜碧岩并櫻欄拂子應器等。昔如大陽玄以皮履布襪以寄浮山圓鑑、誠有以乎。師南面行事、鐘鼓魚板一時改響、其演法也不爲德山、殆乎爲臨濟。經歲學徒益盛。海衆之中、六群之黨、以違境撼之。師雅不事物、即蹈破鉢多、曾退棄寺、如視脫屣。住居白山之麓眞光寺。時徒衆多染癩、寺之土地妙理權現也、師呵之投河。由是病僧不日而皆痊。

并…①②③ナン 以寄…①②③寄 鼓…③鼓 不爲德山殆乎…①②③則不爲德山 群…③羣 曾…①②③勇 住…①②③住 時…②ナン
也…①②③ナン 呵之…①②③責 而…①②③ナン

師、遂に北するに、即ち大乘寺を空けて住持爲らしめ、依託するに一夜碧岩並びに櫻欄の扨子・応器等を以てす。昔、大陽玄の皮履布襪を以て、「以て」浮山圓鑑に寄するが如く、誠に以有るか。師、南面して行事するに、鐘鼓・魚板、一時に響きを改め、其の演法や、徳山と為さざれば、殆んど臨濟と為さん。歳を経て学徒、益ます盛んなり。海衆の中、六群の党、違境を以て之れを撼かす。師、雅より物を事とせず、即ち彼の鉢多を踏破し、曾「勇」退して寺を棄つること、屣を脱ぐを視るが如し。白山の麓の眞光寺に住居す。時に徒衆、多く癩に染まる。寺の土地は妙理權現なり、師、之れを呵して河に投ず。是れに由りて病僧は日ならずして皆な痊ゆ。

遂に北するに：鎌倉や京都などから北遊して加賀に到ったこと。

大乘寺を空けて住持爲らしめ：大乘寺は加賀（石川県）押野莊野々市（いま金沢市長坂町）に存した東香山禪樹林大乘護国禪寺のこと。紹瑾が大乘寺の席を空けて運良に住持の座を譲ったこと。その時期は正和五年（一一三六）が文保元年（一一三二

七）と見られる。大乘寺は富樫家尚（英俊居士、？—一一三二九）が創建し、永平寺の徹通義介を開山に拜請した禅刹であり、第二世の瑩山紹瑾によって當時は曹洞宗発展の拠点ともい

うべき位置にあった。大乘寺については館残翁『加賀大乘寺史』に詳しく、また石川県立美術館編『加賀の古刹・大乘寺の名宝』なども存する。

依託：頼み託する。住持の座を任せること。

一夜碧岩：大乘寺所蔵の『一夜碧巖』のこと。永平寺開山の道元がかつて南宋禅林での研鑽を終え、明州（浙江省）鄞東東の天童山景德禅寺より日本に帰国しようとする直前に、神人（後世は白山妙理大権現とされる）の助化を得て一夜にして筆写した

とされ、一夜本あるいは大乘寺本と称される『碧巖録』である。永仁五年（一二九七）三月二四日に起こった永平寺の回祿の際に大乘寺の道元像と交換されて寺宝となったとされる。『碧巖録』の古写本として貴重である。

櫻欄の払子：櫻欄は棕櫚とも。暖地に産するヤシ科の常緑高木で、幹は直立して枝がなく、頂に扇状の葉を群生する。払子は払・払塵とも。獣毛などを束ねてこれに柄を着け、蚊虻を払う道具。後世は仏事法要に際して導師が用いる法具になる。一説にこの櫻欄の払子がかつて如浄が道元に授けたものともされ、大乘寺にこの払子と称される品が現存している。

応器：応量器の略。鉢多羅・鉢盂。僧侶が食事や托鉢などに用いる食器のこと。自ら必要な分量を頂くことから応量器という。

大陽玄：大陽警玄（警延・明安大師、九四三—一〇二七）のこと。江夏（湖北省）の張氏。曹洞宗の梁山縁觀の法を嗣ぎ、郢州（湖北省）京山県の大陽山長慶寺に住持する。臨済宗の浮山法遠に代付して曹洞宗の存続を図ったことで知られる。北宋の天聖五年七月一九日に八五歳で示寂。

皮履布襪：皮履は皮の靴、皮足袋。布襪は直綴のこと、褌衫（上衣）と裙子（袴のある襪）を綴り合わせて一着としたもの。現今の僧侶が袈裟の下に着る法衣のこと。大陽警玄が皮履と布襪を参学門人で臨済宗の浮山法遠に寄せて曹洞の宗旨を存続させんとした「代付」の故事に準え、連良が如何に紹理の信認を得て全面的に大乘寺を任されていたかを述べる。

浮山円鑑：浮山法遠（遠録公・円鑑禪師、九九一—一〇六七）のこと。鄭州（河南省）の人。臨済宗の葉県帰省の法を嗣いで後、大陽警玄に参じて曹洞宗の法脈を預かり、舒州（安徽省）桐城県の浮山華嚴寺に住持する。後に門人の投子義青（青華嚴、一〇三二—一〇八三）を選んで警玄の法と衣履を代付し、

曹洞宗の存続を果たしたことで名高い。北宋の治平四年二月六日に七七歳で示寂。

南面して行事する：正式に住持として法堂にて南面して大衆に向かい、説法示衆や問答商量などの学人接化をなすこと。禅宗寺院は南面して建てられるのを基準としているから、法堂で大衆に説法するときには必然的に南に向かうことになる。

鐘鼓：鐘は梵鐘（大鐘）と小鐘、鼓は太鼓。山内の諸行事において合図として鳴らす法具。

魚板：木魚・梆・魚鼓とも。木で造った龍頭魚身のかたちの鳴らすもの。僧堂の露地などに吊して粥飯の際などに合図として鳴らす。

一時に響きを改め：大乘寺山内の鐘鼓や魚板などの打鳴法を一時に改めたこと。それまでの曹洞宗のやり方を一斉に止め、法燈派のそれに変更したのをいう。

演法：法を開演すること。法堂その他で上堂・示衆や小参などを行なうこと。

徳山：先に「徳山末後句」の古則で取り上げた唐末の徳山宣鑑のこと。劍南（四川省）の周氏。出家して『金剛經』の研鑽に努めて周金剛の異名を得たが、禅宗に転じて青原系の龍潭崇信の法を嗣ぎ、武陵（湖南省）の徳山乾明寺に住持する。咸通六年一二月三日に八六歳で示寂。宣鑑は臨済義玄とともに「徳山の棒、臨済の喝」と称されて唐代禅宗を代表する禅門の巨匠で、ともに機鋒の鋭い学人接化を特徴とする。門下に雪峰義存を輩出して禅宗五家のうち雲門宗・法眼宗の源流となる。

臨済：唐末の臨済義玄（慧照禪師、？—八六六）のこと。曹州（河南省）南華の邢氏。出家して律・華嚴を学び、洪州宗（馬祖系）の黄檗希運と高安大愚に参じて大悟し、希運の法を嗣ぐ。鎮州（河北省）東南の滹陀河畔に臨済院を創建して住持

し、徹底した無事禅を説き、喝を用いた厳格な学人接化を特徴とした。咸通七年四月一〇日（一に咸通八年正月一〇日）に示寂。語録として『臨濟慧照禪師語録』（単に『臨濟録』）が存し、その門流は禅宗五家の一つ臨濟宗と称され、後世の中国・日本の禅宗の主流を形成して現今に及んでいる。

学徒：参学の徒。仏道修行者。学人・学者とも。

海衆：清浄大海衆の略。禅宗叢林に集い合している一団の衆僧（大衆）を海に譬へた表現。

六群の党：古代インドのむかしブツダ釈尊の在世當時に常に徒党を組んで悪行をなし、しばしば戒制定の因を作ったとされる六人の悪行比丘（六群比丘）のこと。ここでは連良の大乗寺運営に支障をなした一群の人々（曹洞宗の過激分子か）が叢林の和合を乱してかなり悪辣な妨害をなしたことをいう。

違境を以て之れを撼かす：よこしまな心で連良の立場を揺り動かした。違境とは背き従わぬ心の状態、邪な境地の意である。

鉢多：鉢多羅の略。鉢盂・応量器のこと。僧侶の食器。托鉢などにも使用する。

勇退して寺を棄つること、屣を脱ぐを視るが如し：六群の党たちの鉢多羅を踏み倒し、あたかも靴を脱ぎ捨てるがごとく飄々として大乗寺を勇退したこと。屣はわらぐつ。連良は気短で潔癖かつ強靱な性格であったものらしい。江戸期に白默穩貞（未曾有頼子、一六七五—一七四六）が記した「通幻和尚人事考」によれば「正和丙辰、瑩山祖師移洞谷、讓大乗席於恭翁良公。」に翁居十三年、至嘉曆戊辰、因_二事退院、大乗虚席数年」とあり、連良が大乗寺を董していた期間を一三年とし、嘉曆三年（一二二八）に住持を退院したと伝えている。なお大乗寺には

曆応元年（一三三八）に至って明峰素哲が入寺して伽藍の復興に努め、その後は明峰派（とくに珠巖派）の禪者によって維持継承されている。

白山：加賀・越中・飛騨（岐阜県）にまたがる御前峰・大汝峰・別山を総称した霊峰白山のこと。富士山・立山とともに日本三霊山の一つ。主峰の御前岳は標高二七〇メートル。奈良時代の泰澄（越大徳・神融禪師、六八二—七六七）によって開山されたと伝えられる。

真光寺：白山の山麓または山下に存したとされる真光寺のこと。ただし、所在地や寺の変遷などは定かでない。状況からして加賀の白山山麓に存した旧仏教系（白山天台か）の教寺というのが妥当であろう。また連良はこのとき正式に住持として入院したのではなく、一時的に身を寄せただけの仮寓であったものと見られる。

瘟に染まる：瘟とは瘟疫すなわち流行病のこと。急性の伝染病あるいは風土病のごときを指すか。

寺の土地：土地神のこと。詳しくは土地護伽藍神。寺院の境内を守護する護法神で、寺内に土地堂を建てて土地神を祀るのが常である。

妙理権現：白山妙理大権現のこと。白山妙理大菩薩ともいい、白山主峰の御前岳の神体である白山比咩神（菊理姫神）を指し、その本地は十一面観世音菩薩とされている。白山妙理大権現はやがて曹洞宗で護法神として積極的に取り入れられていく。

之れを呵して河に投ず：寺内に祀られていた白山権現像が伽藍をしっかりと加護し得ていないために、寺内の衆僧が瘟疫に罹るのだと叱り、その非を責めて尊像を河に投じたとする。

「加賀の伝燈寺・興禪寺の創建」

瑞應山傳灯寺之邊民覺圓、始捨自産之莊田山林、創一梵刹、請師爲開山始祖。丈室之後、翠屏列峙、崑泉倒懸、阿闍大明王現金怒之相於飛流之中、光燄一道然、瀑雪以爍々。寺衆無識者、唯師時々目擊、能作丹青之戲、臨入筆端三昧、雖國工不能敵也、靈驗昭々于世矣。寶光山興禪寺、亦師之權輿也。

應：①心 灯：②③燈 之：①②③ナン 邊：①②③州 之：①②③ナン 莊田：①②③田地 請：①②③延 崑：②岩 金怒：①金怒②
 ③忿怒 然：①②③然 戲：①②③戲 端：①ナン 國：②圖 靈：①灵 昭々：①②③昭著 于世矣：①②③ナン 寶：①宝

瑞応山伝燈寺の辺民覺円、始めて自産の莊田山林を捨てて一梵刹を創し、師を請して開山始祖と爲す。丈室の後、翠屏は列なり峙ち、崑泉は倒に懸り、阿闍大明王、金怒「忿怒」の相を飛流の中に現す。光焰一道然え、瀑雪以て爍々たり。寺衆に識る者無く、唯だ師のみ時々目撃し、能く丹青の戯れを作し、臨んで筆端三昧に入り、国工と雖も敵すること能わず、靈驗、世に昭々たり。寶光山興禪寺、亦た師の權輿なり。

瑞応山伝燈寺：加賀河北郡小坂荘長屋谷（長井谷・長江谷とも）

すなわち現今の金沢市伝燈寺町に存する瑞応山伝燈護國禪寺のこと。恭翁連良が開山となり、大乘寺に対峙するかたちで開創した臨濟宗法燈派の寺院。開創年時については諸説が存するが、連良が入院開堂したのは大乘寺を退董して以降であり、第二世には法嗣の至庵綱存（円通仏眼禪師、？—一三五七）が就任している。室町期には加賀の諸山さらに十刹位として五山脈に列しているが、やがて一向一揆など戦乱で荒廃し、江戸期に入って加賀前田家の外護で諸堂が再建されている。現在は臨濟宗妙心寺派に属する。伝燈寺保存会編『加賀伝燈寺—歴史資料調査報告—』（平成六年三月刊）が存する。

辺民：片田舎や州境に住む人々。ここでは単に近辺の住民のことか。州民。

覺円：如何なる人物かは不明。かなりの土地を所有していた加賀とくに小坂荘在住の土豪であったものと見られ、連良の徳風を尊んで伽藍を建立したのであろう。覺円は法号であろうから、おそらく連良に就いて戒法を受けた在俗の徒と見られる。伝燈寺の付近は小坂荘に含まれ、鎌倉末期には二条家領として海老名氏という地頭が実際の管理をなしていたことが知られており、覺円は二条家の在地代官か地頭の海老名氏などに連なる人物であった可能性も存している。一に関白の二条良基（後普光園院、一三二〇—一三八八）が伝燈寺の開基であったとする説

も存しているが、年代的に見て明確なものではない。
 自産の荘田山林：自産は自ら開墾し産み出した意か。荘田は荘園を構成する田地のことで、租税免除の特権を認められた本免田や、名田以外の田地を指す。

梵刹：清浄な国土、転じて仏教の寺院をいう。

開山始祖：開山は寺院を開創した僧のこと。始祖は最初の祖師。文室：前出。方丈のこと。

翠屏は列なり時ち：翠屏は草木が茂り蒼むした岩崖。列時は連なり聳えていること。現今でも伝燈寺は四方を山々に囲まれた天然の要害ともいふべき自然の勝景に恵まれた地に存する。

巖泉は倒に懸り：巖泉は岩谷から流れ落ちる清泉。伝燈寺の東のかた東谷には釣鐘山から流れ落ちる滝（瀑布）があり、その地は「タイシヨウケン」と呼ばれている。かつて塔頭の泰祥軒が存した地とされ、そこから眺められる滝こそ「行状」にいう巖泉のことであろう。

阿闍大明王：阿闍大明王の誤記であれば不動明王のことであろう。阿闍 akrobya は動揺することがない、不動の意。不動明王は大日如來の応化身として如來の教命を受け、火生三昧に住して忿怒の相を示し、内外の難障と種々の穢垢を焼いて一切の魔軍怨敵を滅ぼすとされている。目を怒らせて両牙を咬み、右手に煩惱惡魔を断ずる劍を持ち、左手に自在の方便を示す索を持つ。怨敵退散や病氣平癒などの祈願に祀られ、密教で惡魔降伏の本尊として信仰される。

忿怒の相：仏像形容の一つ。眼を怒らし、腕を振り上げ、足の位置なども複雑な姿勢が多い。不動明王のほか、十二神将・金剛力士などのすがたがこれに当たる。金想では意味をなさない。

飛流：飛び流れる、早く流れる。はやい流れ、瀑布・滝のこと。光焰一道：一筋の光の炎。不動明王の三昧で身から焰を出す火生三昧のことか。

瀑雪：舞い散る雪。あるいは水の飛沫が雪のように白く舞い散っているさまか。

爍々たり：光り輝くさま。あるいは解け消えるさまか。

丹青の戯れ：丹青は丹砂（赤い絵の具）と青藍（青い絵の具）のこと。転じて彩りをした絵、彩色画。不動明王のすがたを彩色をもって巧みな絵画に描き上げたこと。運良は絵画の素養もかなり深かったものらしい。

筆端三昧：筆端は筆先。筆の運び、筆のすざび。三昧サーマイディ sanadhi は禪定と同義語で、定・等持と訳す。心が静かに統一されて安らかになっている状態、心静かな瞑想。筆端三昧で無心に筆を走らせること、筆の運びに集中する意であろう。

国工：国中でもっとも優れた工匠。ここでは加賀・越中などの国衙専属の画家のことか。一に凶工に作る。

靈驗：不思議な靈力。不可思議な感応があること。

宝光山興禅寺：伝燈寺の西にある金沢市夕日寺町に存した夕日寺が興禅寺のことであると伝承される。夕日寺は古く奈良時代に泰澄が建立した養老山下日寺に始まるとされるが、現今ではわずかに観音堂を残すのみとなっている。あるいは往古の夕日寺が荒廃していたのを運良が禅刹開山として復興し、宝光山興禅寺と名付けたのかも知れない。一に興禅寺が伝燈寺に隣接した地に建てられた尼寺であった可能性も存する。

権輿：物のはじめ、萌芽の意。運良が自ら興禅寺を開創したことをいう。

〔越中の興化寺・兜率寺の創建〕

往越取途於直生山、因詣八幡神祠、向廟中而尿。巫祝蠱怒。神託曰、我特恭敬此師、汝等慎勿觸忤。巫皆戟手駭異。後至于射水郡、剋建興化兜率兩寺、堂宇猗々、學者誦々。凡嚴臨四衆、則破諸方之邪解、死學徒之偷心。預其聽法者皆有益、所以縑白翕然嚮風、如優曇華一現於世。

於：②③ナン 直：②③壇 而：①②③ナン 蠱：①②③蠶 託：③託 此師：①②③ナン 戟手：③戟乎 後至于：①②③至 徒：③者 皆有：③皆正有

越に往いて途を直生山〔ほしじやう直生山〕に取り、因みに八幡神祠に詣でるに、廟中に向かつて尿す。巫祝、蠱怒す。神託ありて曰く、「我れ特に此の師を恭敬す、汝等、慎んで触忤すること勿かれ」と。巫皆な戟手して駭異す。後に射水郡に至りて興化・兜率の兩寺を剋建し、堂宇は猗々として、學者は誦々たり。凡そ嚴しく四衆に臨み、則ち諸方の邪解を破り、學徒の偷心を死す。其の聽法に預かる者は皆な益有り、所以に縑白の翕然として風に嚮くこと、優曇華の世に一現するが如し。

越：越州のこと。北陸地方の越前（福井県）・越中（富山県）・越後（新潟県）に当たるが、ここではとくに越中の地を指している。

直生山：直生は殖生の誤り。加賀から俱利伽羅峠を経て越中の放生津へ向かう途中にある殖生の地を指している。砺波山北東麓の丘陵と平地に立地し、古く砺波郡殖生荘（殖生保）と称された地であり、現在の小矢部市殖生に当たっている。殖生山とは砺波山のこと。

八幡神祠：殖生に存する殖生八幡宮。殖生護国八幡宮・新八幡とも称される。現今の社殿は桃山建築として国指定の重要建造物であり、宝物殿には源義仲（木曾冠者、一一五四—一一八四）の願文をはじめ多くの名宝が保存されている。八幡信仰は八幡

大菩薩（僧形八幡神）に因み、豊後（大分県）の宇佐八幡宮を中心に九州の地に形成され、奈良時代に南都の諸大寺で鎮守社として勧請されてより諸地に広まり、とくに鎌倉の鶴岡八幡宮が建立されて以降、清和源氏の氏神として広く武家の守護神となり、各地の荘園などに鎮守神として勧請されたといわれる。廟中に向かつて尿す：殖生八幡宮の神社本殿に向かつて小便をしたこと。廟は神をまつる殿、宗廟。

巫祝：神職の者。神に仕えて祭事や神事を掌る神官や巫女をいう。巫はみこ・かんなぎ。祝は神主、神をまつる者。

蠱怒：蠱は蜂の本字で、群がること。蜂のごとくに怒る。興奮した蜂のように群がって怒ること。

神託：神のお告げ。神勅。ここでは八幡神の託宣。

我れ特に此の師を恭敬す、汝等、慎んで触忤すること勿かれ：八幡神がとくに運良を恭敬し、神官や巫女らに「この師に逆らつて機嫌を損ねてはならぬ」と告げたこと。触忤は人の氣に触れ逆らうこと。

戟手：怒つて人を撃とうとするとき片手を振り上げ、片手の肘を下に屈げて戟のように張ること。握り拳を打ち振るつた姿をいう。戟は武器のほこ。動詞では、ほこのように曲げること。

駭異：驚き怪しむこと。愕然としたさまをいう。

射水郡：越中西部の射水郡。とくに射水郡大袋荘のうち放生津のこと。現今の新湊市放生津に当たる。富山湾に流れ出る内川に沿つて形成された湾港都市で、西方に庄川や小矢部川が流れ込み、東西に流通する東内川と西内川が合流して富山湾に注ぐ地が湊口である。漁民や舟運・海運業者が多く居住して経済的に発展し、鎌倉中期には守護所が現在の中新湊の付近に置かれ、奈呉城（放生津城）と称せられていた。

興化：黄龍山興化寺のこと。放生津守護所の西方に建てられ、運良の後に法嗣の桂岩運芳（仏照禪師、？—一三七七）や法孫の藏海無尽らが住持し、後に興化護国禪寺の寺号を得て十刹位にも列している。五山派の名刹として運良の系統（仏林派）が京都建仁寺に進出する拠点となっていたが、戦国期に戦乱などで荒廃し、さらに天正一三年（一五八五）の大地震によって庄川の流路が変化した結果、伽藍が河床に沈んですべてが失われたとされ、その遺構すら留めていない。

兜率：興化寺の北方に地続きで建てられたとされる兜率寺のこと。尼寺であつて運良が尼僧や信女ら女性のために創建したとされる。興化寺と兜率寺の二刹は互いに相並んで建てられたも

のらしく、その堂宇はあたかも鳥が翼を張つたように屋根が広がり、多くの修行者が参集したとされる。興化寺と命運を共にしたのであろう。

堂宇は猥々として：堂宇は建物と軒、寺の伽藍のこと。猥は翼。翼々は鳥が両翼を張つたように屋根が整然と左右に広がっているさまであらう。

学者は誦々たり：学者は仏道修行の者。誦々は多い、衆多なさま。従い依つて和らぎ集まるさま。

四衆：仏教教団を構成する人。出家者の比丘（男僧）・比丘尼（女僧）と在家信者の優婆塞（信士）・優婆夷（信女）のこと。興化寺は男性のための堂宇、兜率寺は女性のための堂宇となつていたものらしい。

諸方の邪解：諸方は諸地方・諸国。とくに諸地の禪宗叢林のこと。邪解は邪な理解、誤つた会得。

学徒の偷心：学徒は仏道を学ぶ修行者。偷心は盗みをする心。外に向かつて分別し、他に向かつて求める心。

緇白：道俗に同じ。緇は黒のことで、黒衣を着た出家者。白は白衣を着た在俗信者。

翕然として風に嚮く：多くの道俗がその徳風になびいて雲集すること。翕然が集まり和合するさま。

優曇華の世に一現するが如し：優曇華は優曇鉢羅、udumbara ウドンバラの花。桑科の無花果の一種。三〇〇〇年に一度だけ花が咲く樹といわれ、仏陀の説法に会いがたいことの譬えに使われる。運良の接化の絶大なさまを仏出世に遭遇し得たかのごとき喜びに比している。

「日々の活動と奇瑞」

師野行之時、鷺鷥恆隨行。一日有蟋蟀、忽至于前。師喝便作設利羅。每剪爪髮、或取隨之齒牙、爭取藏去、皆作舍利、若金粟。時人不名、指謂肉身佛。或時失脚、蹈著金剛經、師尚自若。侍僧見之有懼色、即命投火中、燦然經存。水見海濱有岩石屹乎波心。師於其尖上、建石浮圖。蓋師之心、欲來往舟船。乃至海中鱗介之類、游泳于搭影者、共得結緣也。

之：③ナシ 恆隨行：①②③恒隨後 忽至于前：①②③至前③至師前 師喝便：①②③便喝 取隨之：①②③隨 作：①②③成 人名：①②③ナシ 著：①着 見之：①②③見 水：③冰 岩石：①岩岩 石浮圖：①③石塔②一石壇 蓋師之心：①②蓋師之設心③蓋師之設心 來往舟船：①②③舟船往來人皆得瞻仰 游泳于搭影者：①游泳塔影之下者②③游泳塔影之下者 共：①②③並

師、野行するの時、鷺鷥しゅうじゅう、恒に隨行す。一日、蟋蟀しゅうまつ有り、忽ち前に至る。師、喝するに便ち設利羅と作る。爪髮を剪る毎に、或は墮つる所の齒牙、争い取りて藏去するに、皆な舍利と作り、金粟を綴るが若し。時人、名せず、指して肉身仏と謂う。或る時、失脚して金剛經を踏著するに、師、尚お自若たり。侍僧、之れを見て懼色有り、即ち命じて火中に投ずるに、燦然として經存す。水見の海濱に岩石有りて波心に屹つ。師、其の尖上に於いて、石浮圖を建つ。蓋し師の心は、舟船を來往せんと欲す。「人皆な瞻仰することを得たり」。乃至、海中の鱗介の類、塔影に游泳する者、共に結緣を得たり。

野行：野に出て遊歩すること。野山を行脚すること。

鷺鷥：鷺は玄鶴（くろづる）のことで、和訓で「う」「しまつどり」と称される。暗灰色（青黄色）で頭部が露出して後頭部が紅色の鶴で、別名は禿鷺・扶老と呼ばれる。鷺は「さぎ」であり、鶴より小型で頭頂に長い毛があり、別名は白鷺・雪鷺とも呼ばれる。ともに水辺に棲息して魚などを常食としている。別に鷺鷥子といえは仏弟子の舍利弗（サーリブッタ）の訳名の一つ。

蟋蟀：コオロギやキリギリスの類のこと。蜻蛉・虹孫とも。

設利羅：舍利 *sarira* のこと。仏陀や高僧を荼毘に付した際に得られる靈骨のこと。ここでは運良の徳化が虫類にまで及んで縁を結びしめたことをいう。

藏去：納め蓄える、所藏すること。

金粟：金の粒、粟粒のように小さな金。ここでは舍利が黄金色に輝いたこと。

肉身仏：生身の肉体を持った仏の意で、善知識の尊称。肉親菩薩とも。肉身は肉体・からだ。両親から授けられた身体のこと。失脚：足を踏み外すこと。つまずくこと。

金剛經：『金剛般若波羅蜜經』のこと。般若經典の一つで、金剛のように煩惱・執着を断ち切る智慧の完成を意味する。かつて六祖慧能（盧行者、六三八―七一三）がこの經の「心無所住、而生其心」の語句に触れて契発したことや、徳山宣鑑がこの經を研鑽して周金剛と尊称されたことなどから、禪宗では好んで誦誦される。

自若…もとのまま、落ち着いて動かないさま。泰然自若。

侍僧…師僧に随侍する僧。侍者のこと。

懼色…懼れる色、懼れてびくびくする様子。

水見の海浜…放生津から西北に位置する越中射水郡の水見（いまの富山県水見市）の海辺。

岩石…水見の海浜に浮かぶ岩石の小島。唐嶋のこと。水見の海上に浮かび、水見新港から東三〇〇メートルの沖合にある。北東より南西が約六〇メートル、北西より南東が約三五メートルの楕円形で、石灰岩から成る。運良と前後して曹洞宗の明峰素哲もこの地に到り、水見に海慧山光禪寺を創建し、唐嶋に弁財天をまつたとされる。

波心に屹つ…波心は波の真ん中。峙つは険しく聳える、敵めしく

「示寂と後事」

曆應四年辛巳秋八月初、示微恙。十二日剃浴、末後垂誠、委曲付囑、即書偈云、心不是佛、佛不是心、心佛不如、豈亘古今。投筆吉祥而逝。壽七十五。預囑光侍者入蓮華開山吞像和尚、汝護我舍利、其計若干闍維烟氣所及、得五色舍利。果如所言、道俗悲動。塔號大光、室扁常寂。延文五年、後光嚴帝、勅諡佛惠禪師。應永十六年、後小松帝、特諡佛林惠日禪師。

立つこと。乎は介詞。波間の中に高く峙立していること。現在の唐嶋は標高が一メートルほどである。

石浮図…浮図は仏陀ブッダ Buddha の音写、または卒塔婆スツーパー stupa の誤った音写。ここでは石仏よりも石塔の意。この石塔は往來する船舶の目印となり、この地方で最初の灯台であったとされる。『天龍開山夢窓正覺心宗普濟國師年譜』によれば、運良と同時代に当たる仏光派（夢窓派祖）の夢窓疎石（一二七五―一三五二）も相模（神奈川県）三浦の泊船庵に居住していた際、海辺の小島に海印浮図と称する塔を建てており、運良と同様の発想が存する。

海中の鱗介の類…鱗介は魚介のこと、魚類と貝類。大海の中に生きる生類の総称。

塔影に游泳する者…石塔の灯火の光りの下に游泳して業をなす者。漁り火のもとで漁をする漁民たちや船舶で商売をする商人たちのことか。

結縁…縁を結ぶ。仏法に縁を結ぶこと。仏縁を結んで未来に救われる因縁にすること。

應…①応 誠…①②③訓 即…③便 烟…③煙 號…①号 勅諡…③敕諡 佛惠…①②③佛慧 特諡…③特諡 惠日…①②慧日

曆応四年辛巳秋八月の初め、微恙を示す。十二日に剃浴し、末後に誠を垂れ、委曲に付嘱し、即ち偈を書して云く、「心は是れ仏ならず、仏は是れ心ならず、心仏は如ならず、豈に古今に亘らんや」と。筆を投げ、吉祥にして逝く。寿七十五。預め光侍者へ蓮華開山吞像和尚に嘱して曰く、「汝、我が舍利を護れ、其れ若干の闍維の烟気の及ぶ所を計れ、五色の舍利を得ん」と。果して言う所の如くなれば、道俗は悲動す。塔を大光と号し、室を常寂と扁す。延文五年、後光厳帝、仏惠禅師と勅諡す。応永十六年、後小松帝、仏林惠日禅師と特諡す。

曆応四年辛巳秋八月の初め：北朝の曆応四年（南朝の興国二年、一三四一）の秋八月の初旬のこと。

微恙：微かな病氣、軽い病。微症・微病とも。恙は病氣・心配。剃浴：剃髪して沐浴すること。身体を清浄にする。

末後に誠を垂れ：末後は臨終、遷化に臨んで。誠を垂れるは、師が一山の衆僧のために訓戒となる教えを垂れ示すこと。

委曲に付嘱し：懇ろに周到な後事を付嘱すること。委曲は懇ろに、詳しく細かに。付嘱は後人に対して仏法の護持を依頼すること。

偈：偈頌・詩偈のこと。ここではとくに遺偈・辞世偈をいう。心は是れ仏ならず、仏は是れ心ならず、心仏は如ならず、豈に古今に亘らんや：『鷲峰開山法燈円明国師行実年譜』によれば、

かつて運良の師である無本覚心が在宋中に無門慧開に参じた際に、慧開から親しく「心即是仏、仏即是心、心仏如如、亘古亘今」という即心是仏の道理を詠した四句偈を示されたときであるが、運良の遺偈はまさに法祖慧開のことばを踏まえたものであり、全く逆に「悲心非仏」の道理を示したものと見られるよう。

吉祥にして逝く：吉祥は安祥の意。あるいは実際に運良は吉祥坐のかたちで結跏趺坐して坐化（坐ったまま逝く）したもののか、

『延宝伝燈録』の運良の章では「投筆坐化」とある。

光侍者へ蓮華開山吞像和尚に：運良の法を嗣いだ吞像運光（仏心円成禅師、？—一三五一）のこと。このとき侍者として運良に

随侍していたものと見られ、その後、越中婦負郡長沢（いまの婦中町長沢）に大乗山蓮華護国禅寺を創建して開山となる。現今、蓮華寺は富山市梅沢町に移転して存する。寺伝では運光は

北朝の観応二年（南朝の正平六年）一〇月七日に示寂。闍維の烟気の及ぶ所：闍維は荼毘・火葬のこと。火葬のときに煙りの及ぶ範囲。

五色の舍利：五色は青・黄・赤・白・黒。舍利は多く得られるほど徳が高いとされる。

道俗：道人と俗人。出家修道者と在俗信者のこと。悲動：悲しみをあらわにして動哭すること。

大光：運良の遺骨や舍利を収めた墓塔の名。運光らによって興化寺に建てられたものであるが、伝燈寺その他ゆかりの寺院にも同名の卵塔が建てられたのかも知れない。

常寂：運良の墓塔に建てられた塔頭（廟所）すなわち開山堂の名称。一に常寂室でなく常照室であったともされる。

延文五年：北朝の延文五年（南朝の正平十五年、一三六〇）のこと。運良が示寂して二〇年目に当たる。

後光厳帝：北朝の後光厳天皇(弥仁、一三三八—一三七四、在位は一三五二—一三七一)のこと。北朝第四代の天皇で、光厳天皇の第二皇子。観応の擾乱に際して皇位を継承し、皇統再建に尽力し、北朝の安定に貢献する。

仏恵禪師：仏恵禪師とも。運良の法嗣らが朝廷・幕府に働きかけて下賜されたものと見られ、時期的には運良の高弟である桂岩運芳(仏照禪師、?—一三七七)が越中興化寺から京都の京城山万寿寺や東山建仁寺へと陞住していく頃に当たっており、こうした事情から運良に対する顕彰運動がなされたのではなからうか。

勅諭：勅諭。生前の徳行によって示寂後に朝廷から追贈される称号。禪師号・大師号・国師号などが存する。

応永十六年：応永十六年(一四〇九)のこと。運良の示寂してより六九年を経過している。

後小松帝：後小松天皇(幹仁、一三七七—一四三三、在位は一三

「人となりと著述」

其爲人也、面目嚴凜、有御史之風也。近而依之、風韻洒然、如旱天霖、感人深矣。欲昭示後來、使佛祖法眼不滅、故有正法眼藏之語。禪戒正傳破佗邪網、故有血脉相承之訣。愛人及物等之以慈、故有假名見性鈔。怒罵嬉笑莫非佛事、故有種々法語。

風也…③風 藏之語…①②③藏語 佗…②他 綱…①②③綱 之訣…①②③説 鈔…①②③抄 嬉…③嬉

其れ人と為りや、面目嚴凜として、御史の風有り。近づきて之れに依れば、風韻洒然として、旱天の霖の如く、人を感ずること深し。後來に昭示し、仏祖の法眼をして滅せざらしめんと欲す、故に『正法眼藏之語』有り。禪戒、正伝して佗の邪網を破る、故に『血脉相承之訣』有り。人を愛し物に及び、之れに等しきに慈を以てす、故に『假名見性鈔』有り。怒罵嬉笑、仏

八二—一四一二)のこと。後円融天皇の子で、北朝の皇位を継承し、明德三年(南朝の元中九年、一三九二)閏一〇月に南朝の後龜山天皇から神器を受け取り、南北朝合一を果たす。大応派(大徳寺派)の休宗純(夢闡・狂雲子、一三九四—一四八一)はこの天皇の長子とされる。

仏林恵日禪師：仏林恵日禪師とも。当時の興化寺で伽藍の修築か再建、あるいは五山派叢林への参入でもなされたのかも知れず、運良を顕彰する何らかの特別の事情が存したのである。あるいは応永九年(一四〇二)三月に運良の開山塔が改められて塔梁銘が撰せられているなど、運良に対する顕彰がなされているが、仏林恵日禪師の諡号が下賜されたのもその一環であったとも見られる。

特諭：特別に賜る勅諭のこと。ただし、応永十六年に至って運良に対して重ねて勅諭号が下賜される理由は定かでない。

事に非らざるは莫し、故に種々の法語有り。

人と為り：ひととなり、人柄のこと。あるいは「人のためにす」という為人接化の意か。

面目厳凜：面目とは顔つきや容姿のこと。厳凜とは厳も凜もきびしいさま、峻峻な面目。運良は身の引き締まる峻かな威光を持ち合わせた人であったものらしい。

御史の風：御史とは官吏の不正をあばいて取り調べる官。禪の叢林でいえば修行僧や知事・頭首などの役職にある者に対して懈怠や破戒を厳正に取り締まる堂頭あるいは師家を指そう。運良は常に不正や悪行を許さない厳格な立場を貫いたのであろう。風韻洒然：風韻とは気高い人柄、雅やかな趣をいい、洒然とは汚れやわだかまりがなく、さっぱりしているさまをいう。

早天の霖の如く、人を感じること深し：日照りに恵みの雨が降り注いだかのように多くの人々に感銘を与えること。霖は三日以上にわたって降りつづく長雨。

後來に昭示し：後世の学人のために明確に示すこと。後來は後世・将来、また後の世の人、後世の仏道修行者。昭示は明示、はっきり示すこと。

仏祖の法眼：法眼は真実を見抜く智慧の眼。仏陀や祖師が見究めた真理の眼。

正法眼蔵之語：駒澤大学図書館編『新纂禅籍目録』においては運良の『正法眼蔵語』を道元の『正法眼蔵』の末疏の一つのごとくに扱っているが、現存が確認されていない。道元のそれと関わるのであれば臨済禅者による参究として注目すべきものがある。また一に鑿山紹瑾の『秘密正法眼蔵』との関わりも推測

される。

禪戒：禪宗における戒法。十六条の仏戒（菩薩戒）のこと。

邪網：よこしまなものの考え、邪法・邪解のこと。

血脈相承之訣：『血脈相承之訣』は「禪戒正伝血脈相承説」あるいは『血脈相承説』とも。仏祖正伝の禪家の戒法が血脈として相承していることを述べた著述であらうが、その所在は確認されていない。

仮名見性鈔：『仮名見性鈔』は単に『見性鈔』または『見性抄』とも。道元に擬せられる偽撰の『永平開山道元和尚仮名法語』に関する抄物である『永平開山仮名見性抄』との関わりも推測されるが、見性悟道を説いたものであろうから、法燈派の臨済禅者としての自覚の上になされたはずであり、臨済宗における抄物仮名資料の先駆的な存在とも見られる。他と同様にその所在は確認されていない。

怒罵嬉笑：学人に対してなした怒号や罵声、日々の嬉戯や微笑などをいう。

仏事：ここでは仏法のこと。仏法の発露であること。

種々の法語：運良には折々に門下の道俗らに示した仮名法語の類が数多く存したものらしい。『扶桑禅林僧宝伝』や『本朝高僧伝』の運良の章によれば、このほかに運良には語録若干が存したとされる。おそらく『恭翁和尚語録』か『仏林恵日禪師語録』といった表題でまとめられていたものであろう。

〔大野尼寺の観音像贊〕

没後、侍眞蒼皇而趨、點灯供香、祖乃劈脊一棒、棒痕終身不滅。加州大野尼寺、忽罹回祿、有自畫且讚觀自在像、在於烈焰堆裡、人以爲燒失。後觀之、幘子燬却、慈像并讚自若。舉衆異之。即讚曰、弘誓滄海、威德重山、遍利悲體、同塵慈顏、天堂地獄、分身一般、乾坤内外、轉生無間。半甲一鱗、應光空劫、或妃或童、垂迹亂髮、春入千林、華處々發、應物現形、如水中月、云々。

没：①②③歿 侍眞：②侍眞号灵岩後夜偶忘香火祖師定中高呼侍眞 點灯：①点灯②点燈③點燈 有：①②③ナン 畫且：③畫自 在於烈焰堆裡人以爲燒失後觀之幘子燬却慈像并讚自若舉衆異之：①②③火不能燒縹白敬異 即：①②③ナン 體：①②躰③體 劫：①②③汨亂：①②③乱 處々：②処々 云々：①②③ナン

没して後、侍眞、〔号は靈岩、後夜、偶たま香火を怠るに、祖師、定中にて高く呼ぶ。侍眞〕蒼皇して趨りて灯を点じ香を供するに、祖乃ち劈脊に一棒す。棒痕、終身に滅せず。加州の大野尼寺、忽ち回祿に罹るに、自ら画き且つ讚する觀自在像有り、烈焰堆裡に在れば、人、燒失せりと以為えり。後に之れを觀るに、幘子は燬却するも、慈像並びに讚は自若たり。衆を挙げて之れを異とす。即ち讚に曰く、「弘誓は海に湛え、威徳は山よりも重し、刹に遍き悲体、塵に同ぜる慈顔、天堂・地獄、分身は一般なり、乾坤内外、生を無間に転ず。半甲一鱗、光を空劫に応ず、或いは妃、或いは童、迹を垂れ髪を乱し、春は千林に入りて、華は処々に発ぎ、物に应じて形を現すること、水中の月の如し」と云々。

侍眞：侍眞とは禪寺の開山または祖師の真影（頂相）である木像や画像に侍する侍者のことであり、主塔侍者または塔主・塔司とも称されている。開山堂において運良の尊像（御影木像）に侍する侍眞。伝燈寺における消息か興化寺における消息かが定かでない。

靈岩：このとき侍眞を勤めていた禪者の道号であるが、国泰寺本のみが伝えている。運良には絶巖運奇や桂岩運芳（仏照禪

師、？——三七七）らの法嗣が存しているから、門人に巖または岩の一字の付いた道号を付与していたものと見られ、靈岩も門人の一人として運良の示寂後はその廟所（塔頭）を守っていたのであろう。

後夜：夜を初夜・中夜・後夜に分けた最後。夜の終わりから朝までの称。暁天・明け方のこと。

香火：焼香と燈火。仏祖に供えるもの。

定中：禪定（坐禪）の最中。ここでは運良の木造頂相が坐禪すがた（坐像）であったこと。

蒼皇：倉皇・蒼黄とも。慌てふためくさま。

灯を点じ香を供する：灯明を灯し香を供えること。毎朝、侍真は尊像に対して灯明を灯し香を供えて供養することが日課になっており、しかもあたかも生きているかのごとく鄭重に侍奉することを義務付けられている。

劈脊に一棒す：背をめがけて一棒を与えること。劈脊は背中から、真後ろからの意。棒は拄杖か竹篋であろう。

棒痕、終身に滅せず：棒に打たれた痕跡が生涯にわたり消えなかつたことと伝えられる。背景に常に日々の行持を蔑ろにしなかつた運良の生ぎさまが暗に示されている。

加州の大野尼寺：加賀石川郡大野（大野荘）の地すなわち現今の金沢市大野町に存したとされる大野尼寺のこと。ただし、遺跡も不明で、具体的な所在地や変遷などは定かでない。運良が比丘尼や信女など女性の道俗に対して積極的な接化をなしていた消息の一端が窺われる。

回祿：中国古代の火の神の名。転じて火災の意。火事に遭うこと。自ら画き且つ讚する観自在像：運良が生前に自ら画いて賛を付した観自在菩薩（観世音菩薩）の画像。運良が絵画に秀でていたさまは、すでに不動明王画像に関する記事に詳しい。

烈焰堆裡：烈焰は猛火、炎々と燃え盛る火焰。堆は堆い丘、小さな丘。

幘子：幘は梓に画絹を貼ること、またその絹画。子は接尾語。張り付けた掛け軸。

慈像：慈愛に満ちた観自在菩薩の画像。大慈大悲のすがた。

弘誓：一切衆生を救済しようとする菩薩のたいなる誓願。

威徳：威厳。すぐれて気高い徳。

刹に逼き悲体：遍刹は遍界刹土。宇宙法界の遍く至るところ。悲体は大悲に満ちた観自在菩薩の御姿。

塵に同ぜる慈顔：同塵は和光同塵の略で、菩薩が自己の徳を包み蔽し、身を世俗に投じて煩惱の塵に同じながら衆生をしいだいに仏法に引き入れること。慈顔は大慈に満ちた観自在菩薩の御顔。

天堂：天の世界。天界・天上来。天上の安楽世界のこと、色界と無色界の諸天をいう。六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）の一つ。

地獄：地下にある牢獄の意。罪悪を犯した者が死後に入って種々の苦しみを受ける世界。六道の一つ。地獄・餓鬼・畜生の三つをとくに三惡道（三惡趣）という。

分身は一般なり：分身は化身、衆生を導くために種々の姿を応現すること。一般は一樣、一切すべて。観音菩薩がどのような姿にも身を変えること。

乾坤内外：乾坤は天と地、全世界。内外は内と外、主観と客観。生を無間に転ず：転生は生まれ変わることを、無間は絶え間なくつづくこと。ここでは観自在菩薩の化導すなわち衆生済度が果てしなくつづくことか。

半甲一鱗：甲と鱗は甲羅とウロコ。

空劫：成住壞空の四劫の一つ。世界宇宙が全く壊滅してより次の世界が成立するまでの時期。

迹を垂れ髪を乱し：垂迹は化身の迹を垂れて種々の相を化現すること。仏菩薩が衆生を救うために生まれ変わって仮にこの世に出現すること。乱髪は乱れ髪、あるいは髪を振り乱すこと。悪戦苦闘する姿のことか。

春は千林に入りて、華は処々に発ぎ：木々が芽吹き、花々が咲き誇る春の風景をいう。千林は多くの林、連なる林。

物に応じて形を現すること、水中の月の如し：応物現形は仏菩薩

が衆生の機根に応じて姿を現して教化すること。水中の月とは月影が大水にも小水にも自由に宿るように、種々に自由に変化

すること。『金光明經』卷二に「仏眞法身、猶如虚空、応_レ物現_レ形、如_二水中月_一」とある。

〔兜率尼寺の火災と靈異〕

奇峭之語、不學而能之、蓋非夙薰般若之力、無師自然之智、豈可企及哉。兜率尼寺、鬱攸作變、地密邇于祖塔、燎燄之勢、殆不可救。乍神人數輩、頻注瓶水于猛煙、舉衆仰見。于時北風忽南、塔院無恙、所自畫之不動尊像、粲然于灰燼中、遠近頂禮。及瘞履之後、靈異頗多、不遑備載。今據始末大槩、具之於大手筆之草本、以欲潤色爲萬世之標準、與此山不磨。法孫比丘某甲謹狀。

不學而能之：①②不學而能③不能而能 蓋非：①②③則由 豈可企及哉：①②③非世智可當 地密邇于祖塔：①③祖塔密迹②祖塔密迹 乍：①②③ナシ 頻：①②③ナシ 于猛煙：①③於猛煙之中②於猛煙之中 塔：②塔 所自畫之：①②③自畫 尊：①②③ナシ 粲然：①②③ 燼：①燼 頗多：①②之跡頗衆③之迹頗衆 始末大槩：①②前後大略③前後大畧 草本：①②③ナシ 以欲潤色爲萬世：①③潤色以爲萬世②潤色以爲萬世 此：①②③茲 某甲：③某 狀：②狀僧魁

奇峭の語、学せずして之れを能くす、蓋し夙薰般若の力に非ざらんや。無師自然の智は、豈に企及すべけんや。兜率尼寺、鬱攸に變を作し、地密にして祖塔に邇し、燎燄の勢い、殆んど救うべからず。乍かに神人數輩、頻りに瓶水を猛煙に注ぎ、衆を挙げて仰ぎ見る。時に北風忽ち南し、塔院は恙無く、自ら画く所の不動尊像、灰燼中に粲然たり、遠近頂礼す。瘞履の後に及びても、靈異頗る多ければ、備さに載するに遑あらず。今ま始末の大槩を據め、之れを大手筆の草本に具え、以て潤色して万世の標準と爲し、此の山の与めに磨さざらんと欲す。法孫比丘某甲、謹んで狀す。〔僧魁〕。

奇峭：山などが険しく聳え立っているさま。

夙薰般若の力：天性に具えた智慧の力。夙は夙世・前世。薰は薫

修で身に香を薫着けるように善い習慣を身に付けること。

無師自然の智：師から教わったものでなく、自然に備わった天性

の智慧のこと。運良が天性の素質に恵まれた学識兼備の善知識であったさまをいう。

兜率尼寺：越中放生津に存した兜率尼寺は興化寺の北側か北西側に近接したかたちで建てられたものらしく、運良の祖塔や開山

塔院にきわめて近い位置に存したことがわかる。
簪伎に姿を作し：簪伎は繁る所、集まる所。伽藍の密集している
ことか。姿は事故、変わったでこと。

地密にして祖塔に邇し：兜率尼寺の場所が混み合っていて連良の
祖塔に近かったこと。邇は逐と同じく近いの意。

燎焰の勢い：火災の炎の勢い。燎焰は狩りなどで山林を焼き払う
火。野原に放たれて盛んに燃える火。

神人：神人には神と人、神通力をもった人などの意があるが、こ
こでは神に奉仕する神官のことか。風鎮めや火防などの面から
すると、降水を司る水神としての八幡信仰を物語っているのか
も知れず、あるいは近隣の放生津八幡神社などから神官のごと
き人々が逸早く兜率寺に駆け付けて鎮火に尽力したのがこのよ
うな伝承となつたのではなからうか。

北風忽ち南し：富山湾から吹き付ける北風がちまち山からの南
風に変つたことをいう。

塔院：塔頭のこと。禅寺の山内に建てられた祖師の塔所。
自ら画く所の不動尊像：連良自筆の不動明王の画像。先の観音画
像といひ連良は画僧としても才能を發揮していたものらしい。

瘞履の後：遺骨舍利を墓塔に納めて後。瘞は埋める、地中に埋蔵

「行状に付された華岳建胄の後序」

行状後序。

前南禪華岳建胄叟。

越之興化禪寺開山勅諭佛林惠日禪師實錄、予周覽者數十回矣。一字無曾可增損者、實得僧史之筆、乃今遷固也。然有一段脫
所。且聞、師欲到大乘寺之前夕、瑩山夢鷹來集于山門上。厥貌太俊、山怪之。翌日師至、便原前夢、延待首座寮、瑩山謂衆云、
欲參余者、參首座。衆僉參首座。於是山避席、師南面行事、云々。是口碑之所傳也、姑書以作褚少孫之補云。

すること。履は踏む、足で踏み固めること。
靈異：神秘的で不思議なこと。不思議で量り知り難いこと。連良
にまつわる靈異譚。

始末の大概：連良が生涯になした足跡。始末は始めと末、始めか
ら終わりまで、生涯の顛末。大概は大方、あらまし。

大手筆の草本：大手筆は詔勅など国家の重要な文章のこと。草本
は草稿・底本。本史料の以前にまとめられていた草本のこと。

潤色のなところを削ぎ落とした基本史料ともいふべき連良に關
する原初的な伝記史料。連良に關する簡略な足跡(始末の大概)
を記した基本史料が予めに存したものであろう。

潤色：美しく飾ること。文章などを飾って彩りを加える意。

万世の標準：万世は永久、いつまでも変わらないこと。標準は模
範となるもの、他の見習うべき一定の決まり。後生に不朽なら
しめんとして著わされたものであることをいう。

此の山：越中の興化寺のこと。加賀の伝燈寺とする写本もある。

法孫比丘某甲：法孫は法系上の孫弟子。比丘は出家受戒した男僧。
某甲はそれがし。国泰寺本のみが本史料の撰者名を僧魁と伝え
ているが、僧魁が連良の法嗣の誰に嗣法しているのか、師資關

係など詳細はまったく不明である。

①越之興化禪寺開山勅諭佛林惠日禪師實録、予周覽者數十回也。一字無可増損者、實得僧史之筆、雖遷固無以加矣。

前南禪華岳建胄叟。

先度之行狀中、有一段脫所。即空大乘寺、云云。瑩山夢鷹來在山門上。明日師至、便接首座寮。瑩山謂衆曰、參首座者參首座。衆皆參首座。於是瑩山避席、師南面行事、云云。

②越之興化禪寺開山勅諭佛林慧日禪師實録、予周覽者數十回也。一字無可増損者、實得僧史之筆、雖遷固無以加矣。

前南禪華岳建胄叟。

③瑞應山傳灯護國禪寺開山救謚佛林惠日禪師實録、予周覽者數十回也。一字無可増損、實得僧史之筆、雖遷固無以加矣。

前南禪華岳建胄叟。

先度之行狀中、有一段風脫所。即空大乘寺、云云。瑩山夢鷹來在山門上。明日師至、便接首座寮。瑩山謂衆曰、參首座者參首座。衆皆參首座。於是瑩山避席、師南面行事、云云。

行狀の後序。

前南禪の華岳建胄叟。

「越之興化禪寺開山勅諭佛林惠日禪師實録」は、予、周覽すること數十回なり。一字も曾て増損すべき者無し、実に僧史の筆を得ること、乃ち今までの遷固なり。然るに一段の脱所有り。且らく聞く、師、大乘寺に到らんと欲するの前夕、瑩山、鷹の来りて山門上に集うを夢む。厥の貌は太はだ俊にして、山、之れを怪しむ。翌日、師の至れば、便ち前夢を原ね、延べて首座寮に待し、瑩山、衆に謂いて云く、「余に參ぜんと欲する者は、首座に參ぜよ」と。衆僉みな首座に參ず。是に於いて、山、席を避け、師、南面して行事すと、云々。是れ口碑の伝うる所なり、姑く書して以て褚少孫の補を作すと云う。

行狀の後序：本史料に対する跋文。運良が示寂して一世紀あまりを経て著されていることになろう。

前南禪：南禪寺の住持を退院した称号。南禪寺は京都東山に存した離宮を龜山法皇が禪寺となし、聖一派の無関普門（玄悟・大明国師、一一二二—一二九一）を開山に拜請したもので、正式には瑞龍山太平興國南禪禪寺と称し、京都五山では五山之上という最高の寺格を有している。京都市左京区に存する臨濟宗南禪寺派の本山。

華岳建胄叟：臨濟宗聖一派の華岳建胄（初名は惠胄、樵隱子・栗隱叟、一三八六—一四七〇）のこと。建胄は聖一派の潛溪処謙（普円国師、？—一三三〇）の法孫に当たる哲岩祖濬（祖濬とも、一三二四—一四〇五）に法を嗣いでおり、摂津（兵庫県）の澄心寺から京都五山の慧日山東福寺の第一四二世となっている。寛正三年（一四六二）に五山之上の瑞龍山南禪寺の第一九三世に就いており、その翌年の寛正四年九月に運良の塔銘である「越之中州黄龍山興化護国禪寺開山勅諭佛林惠日禪師塔銘并

序」を撰している。ほかに康正二年（二四五六）に臨濟宗松源派（金剛幢下）の心関清通（心伝、一三七五—一四四九）のために「前天龍心関大禪師祖道履歷之記」を記している。文明二年二月二日に示寂。世寿八五歳。塔頭は東福寺山内の常喜庵。

越之興化禪寺開山勅諡仏林恵日禪師実録：本史料の別名であろう。実録は事実を虚構なくありのままに記した記録のこと。

周覽：周見・周観。あまねく見ること。丹念に見回すこと。

僧史の筆：僧の伝記史料としてすぐれた内容のことか。僧史は僧の歴史の記録。筆は書き記すこと、散文の記録。

遷固：前漢の歴史家で『史記』の著者である司馬遷（字は子長、前一四五？—前八六？）と、後漢の歴史家で『漢書』の著者である班固（字は孟堅、三二—九二）を並べ上げた併称。本史料の撰者（僧魁か）の足跡は不明ながら、建青はその文才を称えている。

一段の脱所有り：一区切りの抜け落ちた箇所があること。具体的には運良が加賀の大乗寺に住持した箇所の記事に欠落した部分があったとされる。ただし、それがたまたま欠落したものなのか、曹洞宗との関わりから意図的に削られたものなのかは定かでない。

鷹の来りて山門上に集うを夢む：運良が大乗寺に到らんとする前

日の夜に、紹瑾は鷹がやってきて山門の上に集うのを夢に見たとする。逸話はあたかも北宋末期に大陽警玄より代付を託された臨濟宗の浮山法遠が、後に青鷹の飛来する夢を見て投子義青（青華叡、一〇三二—一〇八三）を得、曹洞の宗旨を付囑した故事にも比せられよう。

首座寮に待し：首座寮は禅林で僧衆中の首座（第一座）が起臥する寮舎。首座寮に招待して首座に任じたことをいう。

余に参ぜんと欲する者は、首座に参ぜよ：紹瑾が積極的に運良に参学すべきことを修行僧らに勧めていることになる。

席を避け：坐席を離れること。避は避け退く、立ち退くこと。住持の席を退董すること。

口碑の伝うる所なり：口碑は世間の言い伝え、口承伝説のこと。『五燈会元』卷一七「永州太平安禪師」の章に「勸君不用

鐫頭石、路上行人人口似碑」とある。碑は永久に滅びない意、碑に刻みつけたように口から口へ永く世に言い伝わること。

褚少孫の補：褚少孫は沛（江蘇省）の人。紀元前一世紀に活躍。王氏（字は翁思）に師事し、前漢の元帝から成帝にかけて博士

となる。師の王氏が前漢の昌邑王に授けた『魯詩』について潤色し、これより魯詩に褚氏の学が起る。『漢書』卷八八「儒林伝」第五八「王氏」伝に記事が付される。

越之中州黄龍山興化護國禪寺開山勅諭佛林惠日禪師塔銘并序

- ①越之中州黄龍山興化護國禪寺開山勅諭佛林惠日禪師塔銘并序
- ②越之中州黄龍山興化護國禪寺開山勅諭佛林惠日禪師塔銘并序
- ③瑞應山傳燈護國寺開山恭翁和尚塔銘

越の中州黄龍山興化護國禪寺の開山勅諭佛林惠日禪師の塔銘、並びに序。

〔風貌と気風〕

師諱運良、號恭翁。卓爾儀形、詔然徳量、禪河教海之辨、棒雨喝雷之機、人皆辟易以却、無嬰其鋒者。

號：①号 爾：①尔 詔：①②③超 辨：②辯 以：②巨

師、諱は運良、号は恭翁。卓爾たる儀形、詔然〔超然〕たる徳量、禪河教海の弁、棒雨喝雷の機、人皆な辟易して以て却ぎ、其の鋒に嬰れる者無し。

卓爾たる儀形：卓爾は高く抽んでいて、高く優れているさま。

儀形とは礼儀に契った姿かたち、威儀ある姿。容儀形体。

詔然たる徳量：詔然では意味をなさない。超然であれば他と懸け離れている、世俗に拘わらないさま。高く超え出たさま。徳量は道徳による器量、徳のある人格。有徳の器量。

禪河教海の弁：禪河は禪定のこと、川の水が火を消すごとく禪定が心の煩惱の炎を静めるのに譬える。教海は八万四千の法門といわれる広大な仏の教えを海に譬えたもの。運良が教禅を併せ

修め、教理と実践を兼ね備えていたことをいう。

棒雨喝雷の機：棒雨は雨のごとく降り注ぐ棒（拄杖）のこと。喝雷は雷のごとく怒鳴りつけること。いずれも運良が修行者を導くのに棒喝を駆使した厳しい機関を用いたことをいう。

辟易：驚き退く、たじろぐこと。勢いに恐れて尻込みをし、所を易える意。

其の鋒に嬰れる者無し：運良の機鋒に圧倒されて立ち向かう者がいないこと。嬰は触れる・さわることをいう。

〔参学の要約〕

初參洞谷瑾禪師、旁搜曹洞之旨。後詣南紀鷲峯法燈國師、師示以狗子話。一夕豁然大悟、遂吹起法灯不燄之照矣。又遊南都講寺、以化律虎。逮入於東浴禪窟、乍伏僧龍。

初：②ナン 詣：②謁 紀：②紀之 燈：①灯 悟：①②③悟也 灯：②③燈 燄：①②③焰 矣：①②③也 遊：③游 逮入於東浴禪窟：①入東浴法窟②③入東浴禪窟 乍：①③以②目 龍：①竜也②③龍也

初めに洞谷の瑾禪師に参じて、旁ら曹洞の旨を搜む。後に南紀の鷲峯の法燈國師に詣るに、師、示すに狗子の話を以てす。一夕、豁然として大悟し、遂に法灯が不焰の照を吹き起こす。又た南都の講寺に遊び、以て律虎を化す。東洛の禪窟に入るに逮んで、乍ち僧龍を伏す。

洞谷の瑾禪師：永光寺の瑩山紹瑾のこと。「行状」の記事をそのまま受けて運良が遍参の最初に紹瑾に学んだとする。

南紀：南紀は紀伊（和歌山県）のこと、京畿の南端にあることがらう。

鷲峯の法燈國師：紀伊由良の鷲峰山興國寺の無本覚心のこと。

不焰の照：法燈すなわち覚心の禅旨を仏法の燈になぞらえ、燃え盛らない焰火の輝きを吹き起こしたとする。

南都の講寺：南都は奈良・平城京。講寺は講院、経律論の三蔵な

どを研究する寺院。

律虎：律に通達した者を虎に譬える。戒律にすぐれた高僧。ここでは南都東大寺の戒壇院に居した律僧。

東洛の禪窟：東洛は洛東に同じ、京都（洛陽）の東。禪窟は禅定を修する者が住む岩窟。禅僧の住居、禅宗寺院。

僧龍：すぐれた僧を龍に譬える。禅定にすぐれた高僧。万寿寺の南浦紹明（大応國師）のもとの消息を指す。

〔接化の特徴〕

大凡若道契王臣、行感神鬼、青鷹兆夢、白鷲隨行、可謂解慧三昧者也。且夫師資叮囑、賓主酬對、及生平禪坐經行之偈頌、舉足下足、靡不佛法規範。人事警策矣、今不贅焉、悉見於本山行實。昭々若懸鏡以照物矣。

大：①②③ナン 若：①②③ナン 鷹：①驚 兆夢：①②③夢兆 隨行：①②③馴隨 可謂解慧三昧者也：①②③件々異迹 且夫：①②③及 及生平禪坐經行之偈頌：①②③平生禪餘遊戲製作 矣：①②③者 今不贅焉：①②③ナン 於：①②③于 若：①②③如 矣：①也 ②③也故不重録焉

大凡そ道は王臣に契い、行は神鬼を感じ、青鷹は夢に兆し、白鷺は行くに隨うが若きは、謂つべし、解慧三昧の者なりと。且つ夫れ師資の叮囑、賓主の酬対、及び生平の禪坐經行の偈頌、拳足下足、仏法の規範にあらざる靡し。人事警策は、今ま焉に贅わしくせず、悉く本山の行実に見ゆ。昭々たること鏡を懸けて以て物を照らすが若し。

王臣：国王と臣下。連良の接化が在地の武士から朝廷にまで知れ渡ったことをいうか。

神鬼：鬼神に同じ。超人的神秘力、神妙不可思議なもの。

青鷹は夢に兆し：瑩山紹瑾が夢で青鷹が山門上に集うのを見た翌日に連良が大乗寺に到った消息をいう。

白鷺は行くに隨う：連良が野行すると 鷺がその後隨がったという逸話。

解慧三昧：解慧は理解し悟ること。三昧はサマーディのこと、精神を統一する禪定のこと、定慧・等持・心一境性など意識する。

師資の叮囑：師資は師匠と弟子。叮囑は丁寧に頼み込むこと、懇切に申し付けること。

賓主の酬対：賓主は客人と主人、学人と師家。酬対は応対報答、質問に答えること。

生平の禪坐經行の偈頌：生平はふだん・平常。禪坐は坐禪のこと、結跏趺坐。經行は静かに歩む、あちこち経巡り歩く。偈頌は仏教の詩句・漢詩。連良が平生に坐禪や經行の折りに詠んだ漢詩文。

拳足下足：足を挙げたり下ろしたりする。日常の起居動作。『禅門諸祖師偈頌』卷一に載る洞山良价（悟本大師、八〇七—八六九）の「文中銘」に「拳足下足、鳥道無殊、坐臥經行、莫非支路」とある。

佛法の規範：規範は手本・鑑、連良の日常の行動がすべて仏法の活きた指針となったことをいう。

人事警策：人事は禅宗叢林で行なう礼式・作法や挨拶問候。あるいは姓氏・生縁の意もある。警策は訓戒・警告の意で、警覚策礼すること、仏道修行を励ますこと。

本山の行実：本山は興化寺のこと。行実とは先の連良の「仏林恵日禅師行状」を指す。

昭々たること：明らかさま、はっきりと現れているさま。鏡を懸けて以て物を照らす：鏡がものをありのままに写し出すこと。連良の「行状」がその足跡を公平無私に表現していることに譬える。

「示寂と後事」

曆應四禩辛巳秋八月初、示微疾。十二日、親自剃浴、乃書偈云、心不是佛、佛不是心、心佛不如、豈互古今。輒擲筆安祥逝矣。世壽七十五。闍維後、其徒光侍者、收拾設利。蓋順師遺命也。塔號大光、室扁常寂。延文五年、後光嚴帝、勅謚佛惠禪師。應永十六年、後小松帝、特賜佛林惠日禪師。塔于本寺、系以銘。

曆應四禩：①曆應四祀②③師曆應四祀 自：①②③ナン 云：①②③曰 互：①②③互 輒：①輒 祥：②③詳 收：①②③収 號：①②
号 謚：①②謚 佛惠：①②佛慧 應：①②応 六：③六己丑 惠日：①②慧日

曆應四禩辛巳秋八月初め、微疾を示す。十二日、親自ら剃浴し、乃ち偈を書して云く、「心は是れ仏にあらざ、仏は是れ心にあらざ、心仏は如ならず、豈に古今に互らんや」と。輒ちに筆を擲ち、安祥として逝く。世壽七十五。闍維の後、其の徒、光侍者、設利を取拾す。蓋し師の遺命に順うなり。塔を大光と号し、室を常寂と扁す。延文五年、後光嚴帝、佛惠禪師と勅謚す。應永十六年、後小松帝、佛林惠日禪師と特賜す。本寺に塔し、系ぐに銘を以てす。

禩：祀の別体。神靈を神位に下ろしてまつる意。ここでは年（とし）に同じ。この一段は「行状」と重複する箇所は註を付けない。

微疾を示す：微疾は少しの病い、一寸した病氣。微恙・微痾とも。高僧が病を得ることを示疾という。

親自：二字ともで「みずから」の意。手づから、自分から。自分で直々に。

剃浴：剃髪と沐浴。頭髮を剃り、身を洗い浄めること。

安祥：安詳に同じ。安靜の状態。落ち着いていて行儀正しいこと。坐禪に安住することを安詳三昧という。「行状」では「吉祥」とする。

本寺：興化寺を指すと見られるが、同文の塔銘が伝燈寺にも建立されたことであろう。

「華岳建胃の記した銘文」

厥銘云、赫々慧日、光破夏夷、常照寂爾、曾無盈虧。維師行業、古今不移、大機大用、殺活臨時。嗔拳熱喝、一等慈悲、如遼天鶴、似踞地獅。勅號再降、契兩朝帝、法運所系、承一國師。南紀創業、北越建基、平生確論、潛子器之。大唱祖道、盛行

禪規、青鷹瑞兆、大陽孤兒。一夢兩覺、彼々不知、經像示異、神鬼著奇。東山祖圖、聯彼五葉、南方佛法、分此一枝。若墮齒牙、若剃髮髭、設利如粟、貼器離々。又化火後、璨如摩尼、烟氣所及、木葉琉璃。雲湧青巒、無縫之塔、月印滄海、不磨之碑。大人境界、豈易津涯、鬻彼像教、僅々萬支、龍天所護、日月無斯。皆寬正龍集協洽秋九月日、前南禪華岳建胄老衲謹銘。

云：①②③曰 慧…③惠 破：①②③被 號：①②号 兩：①②③二 鷹：①鸞 經：③紅 奇：①②奇 若剃…③或剃 離々…③離離
如：①②③若 烟…③煙 琉：①③瑠 像：②③象 僅々…①②③億々 龍…①竜 斯…②③期 秋…②穠
厥の銘に云く、

赫々たる慧日、光は夏夷を破り、常に照らして寂爾たり、曾て盈虧無し。

維れ師の行業、古今、移らず、大機大用、殺活、時に臨む。

嗔拳・熱喝、一等の慈悲、遼天の鶻の如く、踞地の獅に似たり。

勅號、再び降りて、兩朝の帝に契い、法運の系ぐ所、一國師を承く。

南紀にて業を創し、北越にて基いを建つ、平生の確論、潛子、之れを器とす。

大いに祖道を唱え、盛んに禪規を行す、青鷹の瑞兆、大陽の孤兒。

一たび夢み兩たび覚む、彼々知らず、經像は異を示し、神鬼は奇を著わす。

東山の祖圖、彼の五葉を聯ね、南方の佛法、此の一枝を分かつ。

若しくは齒牙を墮し、若しくは髮髭を剃れば、設利は粟の如く、器に貼きて離々たり。

又た化火の後、璨として摩尼の如く、烟氣の及ぶ所、木葉は琉璃のごとし。

雲は青巒に湧く、無縫の塔、月は滄海に印す、不磨の碑。

大人の境界、豈に津涯に易おそまらんや、鬻たる彼の像教、僅々たる萬支、龍天の護る所、日月、斯きること無し。

時に寬正龍集協洽秋九月日、前南禪華岳建胄老衲、謹しんで銘す。

赫々たる慧日：赫々は明らかで盛んなさま。慧日は仏の智慧を世の中を遍く照らす日の光に譬えたもの。運良の諡号である仏林慧日禅師になむ表現。

光は夏夷を破り：夏は古代中国の夏の王朝を意味し、中夏（中華）で中国のこと。夷は東夷で、東方の異民族のこと。夏夷で世の中、世界の意。慧日の光が世の中を照らすこと。破は被か。被であれば覆う、遍く及ぶこと。

常に照らして寂爾たり：運良の墓塔に建てられた塔院である常寂室になむ表現。寂爾は静かなさま、寂しいさま。

大機大用：偉大なはたらき、並外れた活作略。機は機根、用ははたらき。

殺活、時に臨む：時に応じて適切な手段を用いること。殺は一切を奪うこと、活は一切を与えること。活かすと殺すと。禅でいう把住と放行を自在に用いて学人を指導したことをいう。

噴拳：目を怒らして拳骨を加えること。噴は瞋に同じく怒ること。熱喝と共に運良の機鋒の鋭い学人接化をいう。

熱喝：激しく怒鳴りつけること。熱は逆上せる、興奮すること。一等の慈悲：一等は一樣に平等なこと。慈悲は与楽と抜苦。衆生を慈しみ福を与えることと、衆生の苦難を救い苦境を脱せしめること。

遼天の鶻：遼天は遙かなる天空、遙かに高く天に透るさま。鶻は隼・くまたか。『虚堂和尚語録』巻一〇「秉炬」の「本然侍者」に「抹過兩重関、放出遼天鶻」とある。

踞地の獅：地に蹲って獲物を窺う獅子。氣力が全身に漲って寄り付くことができない、勇氣が凜々として威風に満ちたさま。

『碧巖録』第八則に「有時一句如踞地獅子、有時一句如金剛王宝剑」とある。

勅號、再び降りて：仏惠禅師と仏林惠日禅師という二度にわたる勅諡号の下賜をいう。

兩朝の帝：後光厳天皇と後小松天皇の二人のこと。法運：仏法の命運のこと。運は折り、機会。

一國師：法燈円明国師すなわち無本覚心のこと。南紀にて業を創し：南紀は紀伊のこと。運良が由良の西方興国寺で禅を究めたこと。創業は事業を始める、基盤を築くこと。

北越にて基を建つ：越中放生津において興化寺を建立したこと。自己の禅風の基礎を打ち建てること。

平生の確論：平生は普段・日常・日頃。覚論は確かな議論。潜子：運良の会下に潜んで修行する優れた人材の意か。

祖道：仏祖の伝えてきた道。祖師単伝の仏道。禅規：禅門の規矩・規範、または禅宗の清規。

青鷹の瑞兆：青い鷹は曹洞宗の法統を代付によって相承した北宋末期の投子義青（青華嚴）のこと。

大陽の孤児：大陽は北宋末期に活躍した曹洞宗の大陽警玄のこと。孤児は父を亡くした子のことで、投子義青を指す。

一たび夢み兩たび覚む：一度の夢で二度も覚める。経像は異を示し：運良が所持していた『金剛般若経』や運良が描いた観自在菩薩像が火中でも燃え残った逸話。

神鬼は奇を著わす：神鬼は鬼神。奇は奇瑞。不思議なこと、仏法に関する有り難い現象。

東山の祖図：東山五葉祖図のこと。東山は蘄州（湖北省）黄梅県東北の五祖山（東山）のことで、ここでは北宋末期に五祖山真慧寺で臨済宗楊岐派の禅風を挙揚した五祖法演（？—一一〇四）を指す。祖図は仏祖の系譜を記した祖統図のこと。

彼の五葉：五祖法演の教えが開福道寧（寧道者、一〇五三—一一一三）・月庵善果（一〇七九—一一五二）・老衲祖証・月林師観

(一四三—二一七)・無門慧開(仏眼禪師、一一八三—二六〇)と五代にわたって継承されたこと。富山県高岡市大田の摩頂山国泰寺には運良が覚心より将来したとされる絹本墨画「東山七葉頂相宗派之図」一幅が所蔵されており、この場合は法演より覚心に至る七代の祖師を東山七葉と称している。

南方の佛法：中国江南の地に展開した仏祖の法門すなわち禅宗のこと。ここではとくに臨済宗楊岐派の流れを指す。あるいは無門慧開の禅を伝えて南紀由良に法燈を立てた無本覚心の法門(法燈派)のことか。

此の一枝：運良が北陸の地に法燈派の教えを根づかせたことをいう。

歯牙を墮し：運良の歯牙が抜け落ちると舍利と化した故事。髪髭を剃れば：運良が髪髭を剃ると舍利と化した故事。

器に貼きて離々たり：器は物を盛る道具。什器・応量器(鉢盂)など。貼は貼り付く、ぴったり付着すること。離離は並び連なるさま、花実などが繁茂しているさま。

化火：火と化す。茶毘に付すること。

摩尼：maniの音写。龍王の脳中にあるとされる宝玉で、宝珠・如意と訳す。『証道歌』に「摩尼珠人不識、如来蔵裏親取得」とある。ここでは運良の舍利が摩尼珠のごとく輝いたことをいう。

木葉は琉璃のごとし：琉璃は瑠璃とも。青金石ともいい、紺青色の宝玉で七宝のひとつ。緑の木の葉が瑠璃のように青く輝いたこと。

青巒：青々とした山。青山。巒は巡り連なった山々。ここでは瑞

応山伝燈寺の存する加賀の山並みのことか。

無縫の塔：卵形で縫稜がなく、一塊の石で造った墓塔を無縫塔という。開山・歴住・亡僧など僧侶の墓石として用いられ、その形から卵塔とも称される。

滄海：青海原・大海。ここではとくに黄龍山興化寺から望まれる富山湾の風光、日本海の海原をいう。

不磨の碑：不磨は擦り切れない、永久になくならないこと。碑は碑文のことで、とくに本塔銘のことを指す。

大人の境界：仏菩薩の心境。大人は大丈夫、ここでは仏や菩薩のこと。

津涯：水際・岸辺。船を着ける岸、船着き場。

斿たる彼の像教：斿は繁る、木が群がるさま。像教は仏教のこと、正法と末法の間である像法のときに中国に伝来したことによる。

僅々たる万支：僅々は恐れつつしむさま。万支は多くの枝。

龍天の護る所：龍天は龍神諸天、八部衆のなかの龍衆・天衆。

日月、斯きること無し：日月は尽きることがない。斯は尽きる、なくなる。

寛正龍集協洽秋九月日：寛正四年(一四六三)九月。龍集は歳次

(一年)の意、木星(太歳)が一年に天空を一次だけ移ることにちなむ。協洽は十二支の未(ひつじ)の異名、寛正四年は癸未に当たる。この年は運良が示寂してより一二年を経過しており、この時期に聖一派の華岳建胃が運良の塔銘を撰している背景は定かでない。

老衲：老僧・年老いた僧。衲は僧衣。

〔追記〕

本稿を作するに当たって、金沢市伝灯寺町の瑞応山伝燈寺住職の宮崎元良師、高岡市大田の摩頂山国泰寺住職（管長）の沢大道師、金沢市野町の嵩嶽山少林寺住職の河野秀道師、および石川県立図書館史料編さん室の室山孝氏に史料の提供など諸般の面で御協力を得ている。記して感謝申し上げます。